
銀魂 ～銀色の魂は決して折れず～

皆大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 ～銀色の魂は決して折れず～

【Nコード】

N0967T

【作者名】

皆大好

【あらすじ】

キラさんの嘘予告である「銀魂 黒夜叉篇 ～侍の魂は決して折れず～」をキラさんの許可を得て小説化！

また、この物語はキラさんが執筆した『銀魂「愛しの彼に振り向いてもらうためにはやっぱりアレコレやってみるべし」』の後日にもなっております。

相も変わらず、ダラダラな生活をしている『万事屋銀ちゃん』に一本の電話が鳴る。

それが全ての始まりだった。

皆大好、初の『銀魂』ついに開幕

第一訓 「どんな事でも初めては緊張する」(前書き)

みなさん。知っている方はどうも。
知らない方は初めまして。

皆大好といます。

この作品に目を通していただきありがとうございます。

それではこれにて開幕します。

第一訓 「どんな事でも初めては緊張する」

侍の国。

僕等の国がそのように呼ばれていたのは今は昔の話。

二十年前、突如宇宙から現れた天人あまんとの台頭と廃刀令により、侍は衰退の一途を辿っていた。

そんな時代に侍の魂を持った男が一人。

その名は坂田銀時さかたぎんとき。

ひよんなことから万事屋ばんじやで働く事になった僕、志村新八しむらしんぱちと……

「しつけええんだよおおおおお!!」

「へぶう!」

ナレーションをしていた黒髪に眼鏡をかけた和装の少年……志村新八は銀髪天然パーマで和装と洋装が混じったかのような服装をしている長身の男……坂田銀時の飛び蹴りを後頭部に食らい、顔を地に突っ伏した。

完全な不意打ちなので、新八は全身をびくびくさせている。

「何アニメでくどいくらいにやってる初期設定を冒頭で説明してんだよ! テメエはよお!!」

銀時が倒れている新八を指差して怒鳴り散らす。

「だってこの小説。今回が第一話なんですよ! それにこの作者、別作品の第一話は必ず同じ様に書いてるんですから!!」

新八が起き上がりながら抗議する。

「それにアニメの頃から思っただけだよ。何でお前がいつつも

ナレーションやってるわけ？普通、こういうのって主人公がやるもんじゃねーの？」

銀時が死んだ魚のような目で新八を睨む。

「やるもんじゃねーの？って言いますけど、アンタ今までナレーションなんてしましたっけ？というよりナレーションできるんですか？」

新八が完全に起き上がって、半眼で銀時を見る。

「おいおい、ぱっつあんよお。俺は今まで力の半分も出してないんだぜ？それにホラ、主人公ばかりが出張りすぎたらよお、脇役である君達が成長できないわけじゃない？」

銀時がすごく嫌味つたらしい顔付きをして新八を見る。

「……そこまで言うなら、ちゃんとお願いますよ。何せこれ記念すべき第一話なんですからね！」

銀時は新八からナレーション役を引き受けた。

「えー、新八君からどおおおおおしてもやってほしいと頼まれたので、不肖、『銀魂』の主人公である私、坂田銀時がナレーションをさせていただきます」

コホンとわざとらしく咳をしてから銀時はナレーション原稿を読み始める。

「何嘘ついてんだああああ！」という新八の叫びが銀時の耳に入ったが、右から左へと流す事にした。

時の列車『デンライナー』

次の停車駅は過去か未来か？

それとも……

「違うだろおおお！！」

新八が右人差し指を突きつけて、伝家の宝刀である『ツッコミ』を

駆使した。

「何、『銀魂』とは関係ないナレーションしてんだよ！オマエは！しかも劇場版に二回出てもほとんどチョイ役だったくせに！それにさっきも言ったでしょ！コレは記念すべき第一話なんですよ！初っ端からドスベリしたらこの作品の現在、過去、未来が破壊されちゃいますよ！」

新八の容赦ない言葉を銀時は反省の色もなく、右小指を右耳の穴に突っ込んで掃除をしながら聞いたフリをしている。

「あー、ごめんねえ。銀さん、間違つて『車窓から』のオッサンがナレーションする原稿読んでたわ」

銀時は原稿を丸めて何故かそこにあつたゴミ箱に放り投げる。

コトンという音を立てて、ゴミ箱の中に入る。

「あとな、一回も出演した事ねーヤツに言われたくねーんだよおおお！！」

銀時が左足を軸にして、右回し蹴りを繰り返して新八のこめかみに狙いをつける。

「げぶしっ！！」

新八が後方へと吹っ飛ぶが蹴られ慣れているためか、すぐさま起き上がる。

「事実じゃないですかあ！その後、去年くらいに深夜で海外のヤツ放送してましたけどアンタ悪ノリし放題だったじゃないですか！」
「情けないアルなあ」

銀時と新八が睨みあい罵りあう中で、のっしりともものっそりともいえる足音を立てて、二人の前に一人と一匹がやってきた。

全身白い体毛で覆われ、愛らしい容姿をしている巨大生物――定春と 定春の上に乗っかっている橙色の髪で赤色で中華風の服装をしている少女――神楽である。

「男二人がガン首揃えて、ナレーション一つもできないなんて情けないアル。ここは『銀魂』のヒロインである不肖、この神楽サマがやらせてもらっネー！」

神楽が定春から降りて、どこからともなく現れたナレーション原稿を受け取って、読み上げる。

一九九X年

世界は核の炎に包まれた。

あらゆる生命は絶滅したかに見えた。

しかし、人類は……

「何をしてんだ！？ テメエはよおおおお！！」

新八がツツコミ、銀時はツツコミと同時に神楽の後頭部を叩いた。

「銀ちゃん、痛いネ！ 何するアルか！？」

後頭部を擦りながら神楽が銀時と新八を睨む。

「二十一世紀も十年経ってるのに、何世紀末に戻ろうとしてんだ！？ テメエは！」

「十年経ってるからこそ、ここはゲンテンカイキで振り返る事も大切アル！」

銀時の怒号に神楽は負けじと言い返す。

「神楽ちゃん！ 『銀魂』は二十一世紀から始まったから世紀末に戻ったら退化しちゃうからね！ 存在そのものが消えちゃうからね！」

新八の言うとおりである。

『銀魂』は原作もアニメも二十一世紀の作品である。

「てゆーか、まだ全然物語が進んでないのにすでに二千字以上（空白・改行含む）になってるんですけどどうするんですか！？」

新八は問題が起これば何だかんだで解決してくれる銀時に視線を向ける。

神楽も定春も同じ様に向けていた。

「んなもん、この話を第一話じゃなくて第零話かプロローグとでも

表記しときやいいんだよ。作者がどーしても第一話とダダこねるんだったら入力文字限界まで打たせりゃいいんだしよお」

「アンタ、鬼ですか！？一話目から四万字も打たせてたら作者が燃え尽き症候群になっちゃいますよ！そうなったら、この物語が暗礁に乗り上げたまま救助もなくほったらかしになっちゃいますよ！」

銀時のドS発言に新八は恐れながらも、吠える。

「誰も手を差し伸べてくれない作品の末路なんてひとつしかないアル。私、甘党天パとダメガネと一緒にそんな船に乗りたくないネ！遭難もしたくないネ！」

神楽は座礁確定の船には乗りたくないと言ダをこねる。

三人はその場に座り込み、いつの間にか出現していたお茶を飲んでいた。

三人は湯飲みを同じタイミングで置く。

胡坐をかいていた銀時が右太股を叩いてから、立ち上がる。

「うしっ！いつまでもナレーション談義してても始まらねえ！行くなぜメエ等！！」

銀時の一声に新八と神楽も立ち上がる。

「はい！」

「オウヨ！」

「銀魂！銀色の魂は決して折れず。始まりまーす」

銀時の一声で物語はやっと始まりだしたのであった。

*

江戸の空は青く、鳥が屋根と人々をトイレとみなして糞フンを落とすには申し分ない天気。

かぶき町にある『スナックお登勢』の二階にある『万事屋銀ちゃん』ではというと。

オーナーである銀時は長椅子に寝そべって愛読書ともいえる『ジャンプ』を読んでいた。

現在読んでいる漫画は毎週楽しみにしている漫画だったりする。

「あー、空は晴れているけど俺の懐も空^{カラ}だねえ」

見ている側の気が削がれて仕方のないような欠伸を銀時はする。

「銀ちゃん。私の前で欠伸しないで。釣られて眠くなりそうアル」

定春のモフモフ感を堪能しながら、神楽は銀時のドラケぶりを注意する。

「神楽ちゃんの言うとおりですよ。いい大人が昼間からダラダラとジャンプ読んでるなんて褒められるものじゃありませんからね」

暇なので事務所の掃除をしている新八も注意する。

「うるせえなあ。仕事もねーし、金もねーんだから出来る事といえ
ば朝は寢床でグーグーグーしかねえんだよコノヤロー」

「金がない？銀さん。一昨日仕事があつて報酬貰ったばかりじゃないですか？どうしたんですか？」

新八がギギギという音が聞こえそうな感じで顔を銀時に向ける。

「え？あーアレね。貰ったんはいいだけどさ、思った以上に少なかったからね。銀さん、考えたわけよ。日頃散々未払いしてる分もこの際、まとめて支払ってやろうかなあと思つてさ……」

銀時はジャンプのページを捲りながらも報酬のあらましを説明する。

「いい心がけじゃないですか。で、どうしたんですか？」

「銀ちゃん。見直したアル！私達の事ちゃんと考えてるネ！」

新八も神楽も感激している。

新八はその給料で寺門通^{てらかどつう}の新曲CDを購入しようと考えていた。

神楽は好物の酢昆布をたくさん買おうと考えていた。

「でもさ、現実つてつくづく厳しいなあつて銀さん痛感させられたのよ？俺も夢見てお前等にも夢を与えようと思つただけどさ……」。

夢はやっぱり夢でしかねえわけだと思ひ知らされたんだよなあ」

銀時の言葉を聞きながら新八と神楽の拳はプルプルと震えていた。

銀時の右手は何かのジェスチャーだという事は新八も神楽もすぐに

理解できた。

あれは木刀――洞爺湖を使う手ではない。

愛車の原チャリを操作する時の手でもない。

そのジェスチャーは従業員にとっては災いではないものだ。

「ぱっつぁんよお……」

神楽は指をパキポキ鳴らしている。

「わかってる。止めはしないよ。というより存分にやっちゃおう。

今回という今回は絶対に勘弁できないよ」

新八は眼鏡をキラリと光らせる。

「神楽ちゃん、新八くん……」

銀時は寝そべった体勢から起き上がる。

二匹の子鬼が瞳を光らせて、銀時に向かっていった。

「何スツてんだあ！この天パアアアア！！」

神楽が右飛び回し蹴りを繰り出して、銀時のこめかみに直撃させてぶっ飛ばす。

そこをすかさず新八が銀時の間合いへと入り込んで、起き上がれない状態の銀時にひたすら蹴りを浴びせていた。

神楽も初撃で終わらせるつもりはないらしく、新八同様に銀時にひたすら蹴りを浴びせている。

「ちよっ……、お前等……話を最後まで……」

銀時が弁解の余地を求めようとするが、新八と神楽の蹴りの嵐がやむ素振りはない。

「どうせパチンコでスツたんだろうがああ！テメエはよおおお！！」

神楽が報酬を失った原因を口にしながらひたすら繰り出す。

「何が朝は寝床でグーグーしかないだあ！オマエなんざ夜に墓場で催される運動会に招待されてこいイイイイ！！」

新八は銀時が呟いた事を反芻してからツツコミ+蹴りを繰り出した。

それから五分が経過した。

「お前等ね……。ちつとは……て、手加減しろよ……。あと年長者を敬えよ……」

銀時は地に突つ伏したまま全身をピクピクしていた。

「だったら年長者なら年長者らしくしてくださいよ」

「そうネ。銀ちゃん。新八は新八にはなれないけど、マダオ（この場合はまるでダメな男）から真人間にはなれるアルよ」

「神楽ちゃん。励ますのはいいけど僕の名前をダシにするのはやめてくれない？」

新八と神楽はそれなりに銀時に発破をかけてから、またそれぞれ独自の行動を取り出す。

掃除を続行する新八。

定春にお手やおかわりなどの芸をさせて遊んでいる神楽。

銀時は起き上がって、身体に纏わりつく埃を払いながらまた長椅子に座ってジャンプの続きを読む。

「万事屋^{ウチ}が流行らねえのはきっと看板娘がいねんだよなあ」
ジャンプのページを捲りながら銀時は呟く。

「銀ちゃん」

その言葉を聞いた神楽が銀時の前に立ち、色気のある（神楽本人がそう思っている）仕種をする。

「……………」

「……………」

銀時と新八はしばらく神楽を見る。

「そうですね。看板娘がいるといないでは流行る流行らないってあるのかもしれないね」

新八が神楽から眼を離して冷静に言う。

「オイ、ここにいるダロ。看板娘」

神楽が新八と銀時の前に立ち、先程と同じ様な仕種をしている。

「ババア（お登勢）の店には、たまがいるからなあ」

「たまさんですか。確かに『スナックお登勢』の看板娘といわれて

もおかしくくないですよ。評判もいいですし」

もう一人キャサリンという最近ちよつと有名な三十二歳の尽くすタ
イプの眼鏡美人、二十代でナイスバディな金髪美人と同じ名前の従
業員がいるのだが、敢えて除外する事になっている。

「だから、万事屋にもいるダロ。看板娘」

神楽が主張し、銀時と新八は見るがすぐに視線を外す。

「ああ、そうだな」

「そうだね。いるね」

銀時と新八がどこか生温かい目で神楽を見てから答えた。

「オマエ等、絶対にしばくネ」

神楽は「恨み晴らさでおくべきかあ」と呪詛じみた言葉を呟いて、
癒しのために定春に抱きつく。

定春は「また抱きついてきたのか」という呆れが混じったかのような
眼差しで神楽を見ていた。

「銀ちゃん。万事屋を流行らせる方法がもう一つアルね」

定春に抱きついたままの神楽が銀時に視線を向ける。

「どんな方法だよ？」

「イケメンを一人増やせばいいアル。そしてツツコミを教育させる
ネ」

「なるほど、イケメンがツツコミを入れるかあ。イケメンは何して
も映えるからなあ」

銀時が顎に手を当てて、神楽の主張にも一理あると言つような素振
りをする。

そうなると黙ってられないのが。

「何言ってるんですかああああ！！イケメンがツツコミなんてでき
るわけありませんよ！僕のようなツツコミできるイケメンいますか
！？」

新八が自らの危機を感じたのか、反対を表明する。

「捜せばいるんじゃない？ダイアの原石」

「そうネ。捜せばいるヨ。新一が」

新八の言葉を一蹴するかのように銀時と神楽が非情な言葉を投げかける。

「ちよつとおおおお!!」

新八が魂の悲鳴のような声を挙げると、同時に『万事屋銀ちゃん』に一つしかない黒電話が鳴り出した。

ジリリリンとやかましく事務所内に響く。

「おい新八い、出るよお」

銀時はオーナー権限で従業員に命令する。

彼はジャンプのページを捲っている。

「嫌ですよ。出てください」

新八は先程のこともあるのか出るのを渋っている。

従業員とて上司に完全服従するつもりはない意思だ。

「新八い、電話に出たら新七にしてやるから出るネ」

神楽が出たらアメを散らつかせてみる。

「それもしかしてアメのつもり!? 絶対に出ないからね! あと僕の名前は出世魚じゃないからね!」

新八はそれでも電話に出る事を渋っている。

「新八い」

ダメオーナーと毒舌同僚が甘えるような声を挙げる。

「わん!」

定春が「早く出てよ。進まないじゃん」とでも言いたげな目で新八を見ている。

「わかったよ。わかりましたよ。出ればいいんですよ。出れば」

新八は観念したのか、黒電話の受話器を取る。

「はいもしもし『万事屋銀ちゃん』です。あ、日輪^{ひのわ}さんですか? どうもお久しぶりです」

日輪からの電話が今回の依頼の始まりであると銀時はなんとなくではあるが予想できていた。

何せ、あの日輪からだ。

ただの世間話目当て暇潰しで電話をかけるような女性ではないからである。

第一訓 「どんな事でも初めては緊張する」(後書き)

次回予告

第二訓 「普段何も考えていないヤツが考える素振りを
するのは怖い」

第二訓 「普段何も考えていないヤツが考える素振りをするのは怖い」(前書き

第一話を読んでくれた皆様。

これから読もうとしてくれている皆様。

第二話を開始いたします。

この前書きも何か考えた方がいいかもしれないですねえ。

第二訓 「普段何も考えていないヤツが考える素振りをするのは怖い」

江戸の地下に存在する遊郭で『常夜の街』と呼ばれ、住人のほとんどが遊女。地上（この場合は江戸）の常識が一切通じないといわれている場所が存在した。

『吉原桃源郷』

そもそもは地上に存在していたのだが、天人襲来時に一度壊滅。売淫御法度に紛れここの利に目を付けた天人によって地下に復興されたというちょっとした歴史があり、そして、ここに売られた者は二度と地上の日の光を浴びる事はないとも言われていた。

だが、それらはいきつい最近には『過去』となった。

ふらりと現れた地上の人間が吉原（こし）を支配していた夜王鳳仙（やおうほうせん）を倒し、本来見ることすら叶わなかった日の光を吉原に照らしたのだ。

今、吉原で生業をする者達にとっては真新しい記憶である。

そして、誰が言い始めたかは知らないがこう呼ばれるようになった。

『吉原の救世主』

と。

*

吉原の空には太陽が照り付けている。

当初はその無遠慮に照らす光に、太陽を見慣れぬ者達は畏敬と畏怖の念を抱いていたが今となつては慣れというものでそのような気持ちちは三日もすれば既に消し飛んでいた。

「もしもし。日輪だけど、銀さんいるかい？」

吉原にある茶屋の一つである『ひのや』の實質的オーナーともいえる日輪ひのわが『万事屋銀ちゃん』に電話をかけていた。

『あ、日輪さん。どうもお久しぶりです』

受話器を取ったのは目当ての相手ではなく、従業員の志村新八だった。

「新八君、久しぶり。神楽ちゃんも元気？」

『あ、はい。元気です。晴太君や月詠せいた つくよさんも元気ですか？』

「ええ。晴太は今日もアルバイトに行ってるわよ。月詠は今日も『百華ひゃっか』の仕事だね」

『え、あ、そ、そうですか……』

新八の声が引きつっていた。

地上人の新八にとって、晴太の労働先は何かと問題があるらしい。屋号以外はすべてモザイク処理しないと見せられないのだから、地上人には刺激が強すぎるのだろうと日輪は思った。

『それで日輪さん。銀さんに何かご用ですか？』

「ええ、いるんでしょう？ちょっと代わってもらえないかい？」

『わかりました。銀さん、日輪さんですよって何露骨に嫌な顔してるんですか！？』

新八の台詞から、『万事屋銀ちゃん』でどのような事を繰り広げられているのかは悲しいことだがすぐに推測できた。

『嫌な顔なんてしてねえよ！ちよつと今日のスケジュールウが狂いそうだから、いやーな予感がしたただけなんだよ！銀さん、働き者だから！』

坂田銀時が新八を相手に屁理屈をこねているのが安易に想像できた。『嘘吐けええええ！！さつきまで寝そべって思いつくそジャンプ読んでただろうがあああ！！』

電話越しでも新八の容赦のないツツコミは日輪の鼓膜を刺すような勢いを誇っていた。

（平日の昼までジャンプ読んでる人にスケジュールなんてないようなものだろうにねえ）

日輪は受話器越しに聞こえてくる銀時の台詞に呆れる。

『銀ちゃん！日輪からの依頼受けて報酬貰って私に酢昆布買ってくるネ！でなきゃ家に入る事は母ちゃんが許さないアル！』

神楽が酢昆布代のために依頼を受けると銀時にせかす声まで聞いた。

『オメーはいつから俺のお母さんになったんだよ！俺の母ちゃんになりたきゃタイムマシンに乗って男作って俺を生んでこい』

『神楽ちゃんの言うとおりですよ！アンタには前回の報酬をパチンコ屋育てるためのエサにしてみました前科があるんですからね！』

従業員（二人とも未成年）にまで生活態度に指摘されている始末だ。（月詠もつくづく面倒な男^{ひと}に引っかけたもんだねえ）

日輪は受話器から聞こえる声で万事屋一同の表情を想像し、苦笑した。

『はあーい。どおーもおー銀さんでえーす』

やる気も誠実さの欠片もない声が日輪の耳に入った。

『もっとやる気だせええええ！』という新八の悲痛の声も日輪の耳に入ってきた。

『もっと誠意出すネ！！このダメ天パあああ！！』という神楽の怒りに満ちた声も後から日輪の耳に入ってきた。

銀時は受話器を新八から受け取り、日輪と対話をする事にした。

散々受話器を受け取る事を屁理屈こねて渋ったのだが、報酬をパチンコでスツてしまったという正論を突きつけられてしまったので取るしかない。

落ち度は誰が見ても自分にある。

それにこれ以上報酬未払い状態だと、新八と神楽が本当にブチ切れてしまう。

それに懐具合も芳しくない。

（こりゃ俺が生きてくためにも受けるしかねえか……）

銀時はやる気のない声を受話器に向ける。

『久しぶりだねえ銀さん。相も変わらず元気で何よりだよ』

日輪は恐らく相も変わらざるの笑顔で話しているのだろう。

「で、何か御用ですかあ？日輪さんよお、俺もスケジュールウが立て込んでるんですけどお。依頼だったら手短かにお願いしたいんですけどねえ」

依頼を受ける気持ちはあるのだが、素直に「はい、わかりました。喜んで引き受けさせていただきます」と言う気にはなれない。

日輪は『万事屋銀ちゃん』の上得意といってもいいのだが依頼内容を聞いたら最後、笑顔で『拒否』という選択肢を自然消滅させるといつとんでもないスキルを持つているからだ。

そのスキルに対して自分は回避する事も罠カードトラップを用いて対処する事も出来ないのも、依頼を受ける前にわざと憎まれ口を叩くぐらいしか彼女に対して反抗する事が出来ない。

あまりにも大人気ないことではあるが。

『今回の依頼は特に難しいもんじやないのよ。月詠の休暇にね。付き合ってほしいんだけど……』

「あの日輪さん。それが一番難しいんすけどね……」

銀時が日輪が持ちかけた依頼に関して率直な感想をもらす。

吉原自警団『百華』の頭であり、『死神太夫』と呼ばれている月詠はとにかく真面目だ。

その真面目さは自分の身体を労わらないくらいだ。

完全な仕事ワーカホリックの虫であり、名前の後ろに英数字で『13』が付く世界一有名な狙撃手とタメを張れるくらいだ。

（あのアバズレ、また無理してるんだろうなあ）

銀時は自分と真逆な性格で、あまりに自身を労わる事に不器用な女性を思い浮かべる。

「んなもん、アンタが「休み取らないと仕事させないからね！」とでも言えばいいんじゃないの？」

右人差し指を鼻の穴に突っ込みながら、提案を試みる。

『あの娘こ、そういう空気も読めるようになったみたいだから迂闊に

言えなくなっちゃったのよねえ。私が言おうとしたらいつの間にか姿消しちゃってたりするし、吉原のために日夜働いてくれてるから強く言えないしねえ」

日輪は困ったような声を出している。

その声色からして月詠の身を案じているのは電話越しとはいえ、ひしひしと伝わってくる。

銀時は人差し指に付着しているハナクソを宙に飛ばしてから決断した。

「まったく、しゃーなーなあ。わーったよ。その依頼引き受けてやるよ」

『さすが『吉原の救世主』様。引き受けてくれると思ってたよ』

先程の声が演技なのでは？と疑いたくなるくらい早い切り替えだった。

「で、何か手は打ってあるのかよ？」

『その辺の事は抜かりなしさ。明日、詳しく依頼を説明するから『ひのや』に来てもらえないかい？』

「へーい。あと団子と大福を……」

ちゃっかりとご相伴に預ろうとしている銀時。

神楽が「どさくさに紛れて集ってるネ。この甲斐性ナシ」と言っていたが、聞き流す。

『わかつてるよ。ちゃんと用意しておくよ』

日輪はそう告げると、受話器を置いたらしく不通状態の音が銀時の耳に流れてきた。

「銀さん。日輪さん、今回はどんな依頼ですか？」

「ああ？いつもの通りで、アバズレの休暇の付き添いだよ」

新八が訊ねてくるので、銀時は依頼内容を話した。

「月詠さん。無理してるんですか？」

新八も自分と同じ様に考えていたようだ。

「日輪が大げさに言ってるだけかも知れねーけどな」

「いや、月詠さんの一日の労働時間は銀さんの一日のグータラする時間以上ですからね。日輪さんが心配するのも無理ないですよ」

「銀ちゃんもツツキーの爪の垢を煎じて飲めばいいネ。そうすれば働き者になれるアル。依頼たくさん来て報酬ガツポリで私のところに酢昆布とご飯がたくさんアル」

新八も神楽も月詠の身を案じている。長編が初顔合わせだけあって、その表情は真剣だった。

「お前等俺をけなしたいの？それともアバズレの心配をしたいの？どっちなの？」

新八と神楽の物言いに銀時は凹^{へこ}んでいたが、従業員二名は見てみぬフリをした。

*

夜となり、吉原という街が本格的に機能し始める時期となった。

女日照りのボンボンや、仕事の接待として得意先をもてなすために訪れたサラリーマンや脛^{すね}に傷を持つ者などが足を運んでいた。

人が溢れている大通りを自分の庭のように、しかし、獲物を捜す狩人のような眼差しと雰囲気放っていた。

女性にしては長身で、出る所は出ていて引つ込む所は引つ込んでいるというメリハリのある体型をしており、顔には傷があるが、吉原の事情を知らない男共なら間違いなく声をかけるだろうとする美しい容姿をしていた。

吉原自警団『百華』の頭であり、『死神太夫』……月詠である。
(今日も小さな事はあったが大きな事件はなし、じゃな)

月詠は愛用の煙管の吸い口を口に含んで煙をふかす。

「頭！お疲れ様です！」

月詠の前に遊女より機動性に優れた衣装を纏い、口元を覆うマスクをした女性が数人現れ、挨拶をしていた。

「異常はないか？」

月詠は唇から吸い口を離して、煙を吐き出す。

副流煙は宙を漂い、夜空へと飛んでいく。

「はい。二、三件ほど問題がありました私等で事足りました」

薙刀を持った百華（便宜上：おなぎと命名）が月詠に報告した。

「そうか」

月詠は報告内容に満足すると、

「頭、そろそろ交代の時間です。後はあちき等に任せてください」

二振りの小太刀を持った百華（便宜上：こだちと命名）が、月詠に休むように促す。

「わっちの事なら心配するな。何の問題もありんせん」

月詠は得意のポーカーフェイスで答える。

「駄目です！日輪様からきつうううく言われてるんです！頭は余程の事がない限り、仕事禁止って！」

刀（長さからして打刀^{うちがたな}）を一振り持った百華（便宜上：おかたと命名）が月詠に更に強く言う。

「日輪がか？」

「……はい」

この三人が嘘を吐いているとは思えない。どうやら本当のことなのだろう。

（ここで、わっちが我を通せばこの三人の顔がたたぬやもしれぬな……）

月詠は仕事の虫ではあるが、『銀魂』の住人の中では珍しいくらい気遣いの出来る女性である。

「わかった。では後はぬしらに任せるぞ。事が大きければ遠慮はいらん。わっちを呼べ」

三人の顔を立てながらも、大事ならば気遣いなく呼べと月詠は釘を刺した。

『ひのや』への道を月詠は早歩きもせず、走りもせずゆっくりと歩く。

煙管の吸い口を口に含んで煙を吸ってから、ふーっと吐く。

副流煙は空へと飛散していく。

月詠は目で追っていくが、すぐに煙は夜空の一部となっていく。

「あやつ等はどつしとるんじやろうか……」

彼女の言う『あやつ等』とは銀時を筆頭とする万事屋一同だ。

（新八も神楽も苦労しとるかもしれぬな。あやつではな……）

あの焼け野原が真人間の生活をしているとは思っていない。そのツケは間違いなく前途有望な少年少女に降りかかる事は間違いないだろう。

付き合いは長くはないが、何故かそう確信を持っていえるところが少々哀しくなってくる。

だが、それは彼の一面でしかない。

『世間体』という名の一面だ。

人の本質を知る上では一番の物差しだが、それでその人そのものを決めるのはあまりに軽率な行為となる事を月詠は知っている。

煙管を左手に持ち替えて、右手を見る。

（あの触り心地、まだ残っておるな）

以前に眠っている銀時の頭を撫でた事がある。

天パがモフモフして柔らかかった。

あの感触を味わったのは生まれてこの方初めてだろう。

右手を見ることをやめ、月詠は先程よりも速く歩き出した。

五分後に月詠は『ひのや』に到着した。

日輪と晴太が笑顔で迎え入れてくれた。

大事がなければ、これで月詠の一日は終わるのだ。

*

かぶき町は夜でも眠らない街なので、ネオンだの街灯だのが睡眠妨害をするかの如くテカテカと照らされていた。

『万事屋銀ちゃん』は眠らない街を演出するための貢献してはいな

い。

神楽は既に押入れで就寝しているが、銀時は寝付けなかった。冷蔵庫から好物のいちご牛乳を取り出し、ラッパ飲みをする。ある程度飲み終えて、満足してから飲み口から唇を離す。

「……はあ。アイツ、どういうつもりであんな事をしやがったんだ……」

銀時は右手で頭部を触れる。

女性に頭を撫でられた経験はあまりない。むしろ、拳だの踵落かかととしなどを食らった数は数え切れないが。

それはとても心地よく『癒し』とか『安らぎ』という言葉を感じたものだった。

いちご牛乳を片手に事務所内では一番立派な席に座る。

障子窓を開けて、夜空を見る。

月がネオンや街灯とは違う優しい光を照らしていた。

「オマケにあんな事まで言いやがって……」

銀時は数日前に日輪の依頼で『ひのや』に赴いた事を思い出していた。

依頼内容は『病床に臥している月詠の監視』だった。

最初はジャンプを読みながら監視をしていたのだが隣で養生のために眠っているとはいえ、気持ちよさそうに眠っている月詠を見て睡魔が自分を眠りの世界に誘うには十分なものだった。

数分後に銀時も意識を手放してしまった。

それから数時間後に、誰かに触れられる感触が眠りについていて銀時を目覚めさせた。

（何だあ？ 銀さんの眠りを妨げる不逞な奴は誰ですかあコノヤロー）
銀時は目を開くと自分の息が届くくらいの距離に月詠の顔があり、彼女が自分の頭を撫でていた。

（何してんのおおおお！？この娘こ、一体何してくれちゃってんのおおおお！！）

大の男が女性に一方的に頭を撫でられる、物凄く照れるというか恥ずかしい。

だが、銀時は振り払う事はおろか何も出来なかった。
まるで金縛りを受けたかのように。

（ねえ誰かぁ教えてえええ！！この娘何で俺の頭撫でてんのおおお！！しかもあの殺風景でも太夫でもない今まで見た事ない顔してるんですけどおおおお！！）

幸いなのか、月詠は頭を撫でる事に夢中なのか自分が両目をパッチリで起きているとは思ってはいないようだ。

どくんどくんどくと心臓が高鳴るのがハッキリとわかる。

風俗などで女遊びをする事はあるが、このようなことになる事はない。

それは相手の女性がその道のプロだからと自分に言い聞かせているからだろう。

（まままま待てよ。落ち着けよ俺え！コイツは『百華』とはいえ吉原の女だぞお、日輪に男オトすテクぐれえ仕込まれてるかもしれねえだろおおおお！！）

銀時は何とか自分に言い聞かせて、高鳴る鼓動を抑えようとする。
だが、そうなると矛盾も生じる。

紅蜘蛛党の真っ只中と終局で遭った^{トラフ}TOLLOVEの事だ。

アレは男慣れしてる女性の態度ではない。そうなると、眼前の女性は男を天国にも地獄に招く場所にしながら完全な生娘という事になる。

当人に聞くのが一番手っ取り早いが、聞けば問答無用でクナイをプレゼントしてくれるだろう。

（天然ならとんでもなく可愛すぎるだろうがああああ！！）

月詠の表情をこれ以上見ることは出来ない。見続ければ余計な考えがポンポンと浮かび上がって自身を悶え死にへと近づけてしまうからだ。

「……わっちも、ぬしを支える者のひとりになってもいいか？ 銀時……」

月詠は頭を撫でる作業を続けながら、優しく言ってきた。

この直後、一人の男が悶え死にという男としては名誉なのか屈辱なのかわからない状態に陥ったのは言うまでもないことだった。

満月を見ながら銀時はいちご牛乳を一口飲んでいた。

「ツラから何か聞かされたにしても、アイツ自身何考えて言いやがったんだ……」

月詠にデリカシーのない事を言った侘びのために『ひのや』へと赴いた際に自分より先にツラこと桂小太郎が中^{かつらこと}にいたのだから、何か自分に関する事を告げられた可能性は十分にありえる。

その直後にあのような事を言われたのだ。

銀時は女性にそのようなことを言われた経験はないに等しい。それ故にわからない。

月詠が何故あのような事を言ったのを。

「ふぁーああ、柄にもなく考え事してたら急に睡魔の野郎が俺をまた眠りの世界へ呼び寄せてきやがったぜ……」

大きく欠伸をしてから、今なら寝れると確信した銀時はいちご牛乳を冷蔵庫の中に入れて和室へと向かい布団へと入り込んだ。

「俺、大丈夫だよ……。ちゃんとあのアバズレのツラ見えるよな？」

銀時の呟きに対して、誰も返答はしてくれなかった。

睡魔が呼び寄せてきたという表現は間違っていないらしく、銀時は瞼を閉じた直後に寝息を立てていた。

こうして坂田銀時の一日は幕を閉じるという事になる。

第二訓 「普段何も考えていないヤツが考える素振りをするのは怖い」 (後書き

次回予告

第三訓 「おもてなし」酒は愚の骨頂」

第三訓 「おもてなし」酒は愚の骨頂」（前書き）

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り登録してくれている皆様。

これから読んでやろうかなあと思ってくれている皆様。

皆大好きです。

この前書き部分にいいアイデアがあつたら教えてください。

では第三話目どうぞ。

第三訓 「おもてなし」酒は愚の骨頂」

「まるで駄目なオッサン」

「まるでダサイオヤジ」

「まるで堕樂したオッサン」

の略称がある。

無職の中年男性を罵倒する際に用いられる呼称がある。

中年親父が自虐ネタとして自身を呼ぶ呼称がある。

「マダオ」と。

*

日輪からの連絡を受けてから翌日。

空は快晴ではなく、ところにより曇りがあって雨が降る可能性がある
と結野クリステルが『お目覚めテレビ』の『結野アナのお天気注
意報』で言っていたので、傘を携帯しながら吉原のある地下へと向
かっていった。

吉原へと通じるエレベーターに乗りながら、依頼内容が気になっ
ていた。

（絶対え笑顔でゴリ押ししてくるんだよなあ。大体鳳仙死んでから
強引な部分が目立ってきたような気がするんだよなあ。それともあれ
が地なのかあ。だったら鳳仙も豪い女に惚れたもんだぜ）

チーンとエレベーターが停まって、ガーッという音を立てながら自
動ドアが開いた。

銀時は気だるい雰囲気を感じながら、後頭部をがしがしと掻きなが
らも日輪が経営している『ひのや』へと足を進めることにした。

「あら銀様。いらっしやいます」

遊郭から遊女が出てきて、銀時を招きいれようとする。

「吉原の救世主様」。ようこそいらつしやいました」

別の遊郭の遊女が招きいれようとする。

「おいおい。こんなお天道様がガン見してる頃から誘っちゃっていいのお？ 銀さん、本気にしちゃうよお」

銀時が遊女の誘いを聞きながら、当たり障りのない受け答えをしながらも足を止めずに歩き出す。

「もう銀様だつたら大歓迎ですよ」

「吉原を救っていただいたんですから」

遊女達も引き下がる様子もない。

自分は吉原では『救世主』のレッテルが貼られており、地上と違って大概のワガママを押し通そうと思えば押し通せるのだ。

だが、そんな気は今のところない。というよりも、そんなことをした日には後々怖いのだ。

「俺も本音だしや今から即座にゴートウヘブンと行きたいんだけどよお。日輪から呼ばれてるから道草食えねえのよ」

軽く手を振って銀時は、断りの言葉を誘ってくる遊女達に告げた。

「銀様」

「いつでもお待ちしてますわ」

遊女達の声を聞きながら、銀時は吉原のことを考えていた。

吉原の支配者は実質的には神楽の兄であり、宇宙海賊『春雨』^{はるさめ}の第七師団の団長である神威^{かむい}となっている。

しかし、この神威。吉原の支配者とは名ばかりで鳳仙のように胡坐を掻いて苛政をしくつもりはまるでないのか放置したままにしている。

つまり吉原は事実上開放された状態となっている。

（あのバカ兄貴が吉原^{こし}に来るとしたら、間違いなく俺を殺しに来る時だろうなあ^{うみはつつ}）

星海坊主に以前に告げられた事がある。

神威は自分を標的にしている事を。

夜兎族相手に自分が一人で戦って勝てるかというと、勝算は認めた

くはないがゼロだろう。

夜兎族として落ち目になりがちな鳳仙でさえも、大人数でボコるという手段でやっとこさ勝てたのだ。

現役バリバリの夜兎族である神威を相手にするにはどうすべきなのか想像がつかない。

（まあ、先のわかんねえ未来に頭使うのもなんだから目の前の依頼に集中しますかねえ）

銀時は気のない欠伸をたらしながら考えを中断した。

「いらつしやい銀さん。わざわざ来てくれてごめんなさいねえ」

『ひのや』に銀時が到着すると、黒髪で車椅子に乗っている女性・

・日輪が笑顔で迎え入れた。

「アイツの休暇ならわざわざ俺がこっちに出向く必要ねーんじゃねーの？電話で片付くじゃん」

銀時にはこれまでに何回か、依頼として月詠の休暇に付き合ってもらったことがある。

それだからこそ、今回の電話での呼び出しは銀時の中では釈然としないものだろう。

「そうなんだけどね。銀さん、月詠が地上で休暇してる時ってどんな感じなんだい？」

日輪は身体的事情があるので、地上に簡単に出向いたりする事は出来ない。

息子の晴太と共に行動している時は晴太に訊ねたりしているが、それでも毎回晴太が月詠に同伴しているわけではないので、知らない一面があっても不思議ではない。

「まあ地上育ちのバカ達に乗せられたりして厄介ごとに付き合わされてる事が殆どだけだな」

銀時は地上での月詠の行動を思い出しながら、率直な感想を述べてくれた。

「バカって銀さん……。知り合い以上の間柄でしょうに……」

銀時のあまりの言い分につい苦笑してしまう。

「そうなるよ、月詠の休暇は殆どその厄介ごとで消化されているというわけね？」

日輪は莓大福と串団子に乗せた皿を銀時の側に置く。

「まあ、そうなるわな。あれで息抜きできたかどうかと判断するのは本人次第じゃね？」

銀時は串を掴んで団子を一口食べてから、「少なくとも俺なら休んだ気にはなんねーわ」と呟っていた。

（いくら休暇といって地上に出しても、厄介ごとに巻き込まれたんじゃあの子が本当に息抜き出来たかなんてわからないのよねえ）

月詠のことだ。訊ねたとしても「充実した」と短くポーカーフェイスで返すに決まっている。

銀時の話から察するに成り行きとはいえ、銀時と二人きりになったこともないのだろう。

月詠が銀時に対して想いを寄せている事は十分すぎるくらいにわかっている。

それに最近、妙に雰囲気が変わったことも。

そして、月詠が吉原育ちでありながらそういうことには鈍くてつかれると素直になれないことも。

（確か月詠みたいなタイプを地上では『ツンデレ』ってこの前に休憩がてらに寄ってくれた『百華』の子達が言っていたわねえ）

母親兼姉貴分としては、娘兼妹分の応援ぐらいはしてやりたいというのが本音だ。（決して本人が面白そうだからやっているわけではない）

「んで、わざわざ電話で呼び出して俺に何をさせようとしてんの？ アンタ。それに確認するかのようにアイツが地上で何してるかまで聞いてよお」

銀時は茶をすすってから、死んだ魚のような目をこちらに向けてくる。

「そうね。そろそろ本題に入ろうかしらね。内容は今まで通りの月

詠の休暇に付き合うことよ」

「それだけじゃいつも通りと変わらねえじゃん」

「まあ、話は最後まで聞いてちょうだい。月詠は明日の夕方以降三日間休みを取る事になっているのよ」

「取る事になっているってもしかしてアイツはその事を……」

自分の口ぶりからして銀時がぶつける質問は自分の想定内のことだった。

「知らないわよ。これから知る事になるんだからねえ」

「アンタ、もしかして何かした？てゆうか何かするの？ねえ教えて何か凄く怖いんですけどおお！！」

銀時のヘタレ発言を右から左へと聞き流す。

「何かするって別に銀さんが恐れるような事はしないわ。ただちょっと外堀を埋めただけよ。みんな、この事を話したら喜んで手伝うって言うてくれたわ」

「つまりアイツの逃げ口をなくしたわけか……」

銀時は理解してくれたようだ。ちゃんぽらんが歩いているようにも思えるがバ力ではない、実際に頭はキレる方なのだ。

「で、そんな周到に計画立てる本当の理由は？アンタがアイツに息抜きさせたいってのは本当だろーけど、何で今回に限ってそんな裏工作までしようと企んだワケ？」

「そうねえ。理由は最初に言ったように月詠に息抜きをさせるためのよ。できれば吉原の事を忘れるくらいにね」

銀時の眉がピクリと動いた事を見逃さない。

「吉原の事を忘れさせる？そりや不可能だろ。アイツに吉原の事を忘れさせるっつーことは俺に糖分を忘れさせる事とおんなじ意味だぞ」

（糖分と同じってのが銀さんらしいといえばらしいわね……）

銀時の言葉に日輪はつい笑ってしまった。

（吉原を忘れたアイツ……ねえ）

銀時は日輪を会話を引き金に想像してみる。

（アイツに吉原の事を忘れさせるなんて無理無理イ。絶対に無理イ）
どうやっても想像できない。吉原を忘れて地上で満喫している月詠の姿なんて。

それは先程言ったように自分に『糖分』を忘れろと同じ意味を示すのだ。

決して切れないもの、ということになる。

「で、日輪さん。俺は何をしたらいいワケ？いつもみたいに三日間の休暇に付き合えばいいワケ？」

話の流れからしてそうなる事を予想した銀時は先に言ってみる。

「そうだね。依頼の大まかな部分は月詠の休暇に三日間付き合う事になるよ。唯一つ違う事としたら三日間、月詠を吉原に近づけないようにしてほしいんだよ」

「吉原に近づけない？一日終わったら家に帰るもんだろ？家無しでホームレスないかぎりは帰巢本能には逆らえねえよ」

「ここが今までと違うところだよ。いくら三日間休暇を与えたといっても結局吉原に戻ったんじゃ、あの子は休暇を返上しかねないからねえ」

日輪の言っている事は決して杞憂ではないことは銀時にもわかる。付き合いは決して長くはないが、安易に想像できることだ。

愚直なまでに真面目なのが月詠の長所であり、短所にもなっている事は銀時も理解している。

「まーったく、アイツは何でそう肩肘張りっぱなしなんだろうねえ。少しは手え抜くことを覚えりゃいいのによお」

銀時はそう言いながら、以前に志村新八や神楽に向けて言った事がある。

「本当に苦しい時は言ってくれさ。奴あ人よりそれをギリギリま

でしない奴なんだよ」

と。

どこまでがギリギリなのかはわからない。
言わないという事はまだなのかもしれない。

それともそういう表現をする事が『悪』だと思っているから言わないのかもしれない。

「全くだよ。こういう時ばかりは銀さんの爪の垢を煎じて飲ませてやりたくなるね」

「オイオイ。んなもん飲ませたらアイツ、俺みたいになっちまうよ？」

「ふふ。そりゃ困りもんだね。月詠がマダオ（意味：まるでダメなオンナ）になっちゃうよ」

日輪はそうなった時の月詠を想像したのか笑っていた。

いちご牛乳をガブガブ飲んでる月詠や、長椅子に寝転がってジャンプを読んでいる月詠や、死んだ魚のような目をして吉原を歩いている月詠でも想像しているのだろう。

「何で俺の爪の垢飲んだら、即座にマダオ決定なワケ？おかしいじゃん。銀さん、いいトコだってたくさんあるからね」

自分で勝手に想像しておいてあまりな物言いに失礼な奴だと銀時は思いながら抗議する。

「んで、地上に三日間いさせるってのはわかったけどよ。その間、寝床はどうすんだよ？アイツたんまり稼いでるからその辺で困る事はないと思うけどよ」

月詠の懷事情を明確に知っているわけではないが、それでも自分よりは温かいだろうという事は安易に想像できる。

「月詠に無駄遣いさせるわけにはいかないからねえ。それに三日間、あの子を寝泊りさせてくれる場所は既に決まっているのよ」

日輪が笑顔でこちらを見ってくる。

それだけで銀時の背筋にゾクつとするものが走った。

（何コレ？ねえ何コレ？ものすつごく悪い予感しかないんですけどおおおお）

「あのお日輪さん。もしかして……」

「銀さん。頭の回転が早くて助かるわぁ。三日間、月詠のことお願いね？」

日輪は両手を合わせて、笑顔で頼んできた。

「はあああああああああああああ！？」

銀時は思わず大声を上げずにはいられない。

「おま、何考えてんだよ！？ガキを親戚の家に泊めるのとはワケが違っただぞ！？」

銀時とて動揺せずにはいられない。

万事屋を起業してからかなり経つが、事務所内に女性を寝泊りさせた事はないと言った方がいい。（神楽は子供なので除外している）

「わかつてるわよ。でも意外ね。銀さんがそんな事で動揺するなんて、日頃から下ネタを連発させてるからてつきり二つ返事で迷いなく了承してくれると思ったのに」

日輪は銀時とは対照的に落ち着き払っていながらも、銀時の反応に眼を大きく開けていた。

「あのお日輪さん。いくら『吉原の救世主』とか下ネタを連発させてるからって銀さんも男なのよ。いわば股にね、まだまだ現役な獣がいるわけよ。そんな所に明らかにおぼこ（意味：世間慣れしていない、初心な娘）なアイツを放り込んだらどうなるかわかるでしょおおおお！！」

銀時としては、三日間の休暇に付き合うことは依頼だから了承できる。だが三日間一つ屋根の下に宿泊となると話が変わってくる。

キャバクラやソーブランドといった風俗に行くが、その手の女性と恋愛関係に発展した事はないしましてやお持ち帰りもした事はない月詠が自分言うように本物のアバズレ（意味：悪く人ずれしないで、厚かましいこと。また、そういう女）ならばいいのだが、実際はそんな事はないのだから余計に問題だ。

「まあ、そうなつたらその時は銀さんと月詠の意思に任せるわ。二人ともいい大人だしね。でもね銀さん」

「新八君や神楽ちゃんがいる前ではダメよ？」

日輪のからかいの言葉に銀時は顔を赤くして、抗議した。

日輪からの依頼を引き受ける事になった銀時は地下である吉原をで
て地上であるかぶき町へと戻っていた。

一つは今回の依頼の報酬の前金。

（日輪のヤロー、今回は随分と気前がいいじゃねえか）

これで以前にパチンコでスツた分も帳消しに出来るし、新八と神樂にイロをつけて給料を渡す事が出来る。

事務所へと戻ろうとする中で、銀時は底のないダンボールに身体を通して、薄汚れた犬を引き連れてかぶき町内をうろついている中年男性がこちらに寄ってきた。右手には古本屋のマークが入った買い物袋が握られていた。

自分の良く知っている人物だ。

「あ、銀さん。何まーた仕事もせずにブラブラしてんの？」

「違えよ。仕事の打ち合わせの帰りだよ。長谷川さんこそ、何？まーた家賃滞納したから踏み倒して逃げてきたの？」

中年男性 - - はせがわたいぞう 長谷川泰三である。

「違うよ。借金取りから逃げてきたんだよ」

銀時にしてみたらどっちも似たようなもんだと思ってしまふ。

「仕事の打ち合わせ？その仕事結構なお金になるんじゃないの？銀さん景気よさそうな雰囲気纏ってるし」

長谷川のサングラスが太陽に照らされたのかどうかはわからないが、キラリと光った。

「何、長谷川さん。長いマダオ（意味：まるでダメなオッサン）生活でそんなオカルトじみた能力まで身についたの？」

「いや身についてないから。どうせつくならツキの方がついてほしいくらいだし……」

銀時の即興なボケに長谷川は冷静に返す。

長谷川という男。人はいいのだが壊滅的なくらいに運がない。（この部分には万事屋も一役買っていたりする）

運を手放す原因は第三者から見たら『身から出たサビ』なので、弁解の余地はないが銀時としてはこの長谷川は不思議と憎めない相手だ。

現在は年齢の離れた友人関係である。

「古本屋でエロDVD買う余裕があるんだったら、たまには奥さんに何か送ってあげなよ。まだ離縁してないんでしょ？」

この男、借金こさえてはそっち方面に浪費している。

「なっ……、ちよつと銀さん。公衆の面前でそういうこと言わないでくれる？最近ハマに連絡してるんだからね！」

長谷川にもプライドがあるのか抗議した。

長谷川ハツ - - 長谷川の妻であり現在別居中であるが、長谷川を嫌って別居したわけではないため何だかんだでマダオ（意味：長谷

川）の事を気にかけていたりする。

（無理だよなあ。今の長谷川さんじゃなあ……）

職をなくしてすぐの長谷川とならばヨリを戻してもハツにはマイナスにはならないだろう。

だが、今の長谷川とヨリを戻すという事は何トンもの錘おもりを背負って行く事と同じだ。

その錘の原因の中にハツが原因となるものがあればいいのだが、そんなものがないのだからヨリを戻してもハツにとってはマイナスにしかない。

長谷川とていい大人だ。その辺りはわかっているのだろうと銀時は考えている。

「で、奥さん。何て言ってるの？」

「な、なあ銀さん。その話、ここでしないとダメ？」
マダオが一人前に恥ずかしがっている。

「別にここじゃなくてもいいけどね、長谷川さんには元既婚者として聞きたいこともあるし」

「ちよつとおおおお！！俺まだ離婚してないから元つてのはいらないからねええええ！！」

銀時のさらりと言った台詞に長谷川は強く反発した。

第三訓 「おもてなし」酒は愚の骨頂」（後書き）

次回予告

第四訓 「ご利用は計画的に。計画は完璧に」

第四訓 「ご利用は計画的に。計画は完璧に」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

次回からここは前回のあらすじを書こうと思います。

それでは第四話。どうぞ。

第四訓 「ご利用は計画的に。計画は完璧に」

その男は三十八歳である。

その男はとある家の婿養子である。

その男は幕府の入国管理局の局長という輝かしい職業に就いていた。

その男はあろうことが、警護対象の天人を殴り飛ばしてしまった。

その男は不祥事の責任の際の切腹に怖気ついてしまい逃亡してしまった。

その男は職を転々とし、不動産及び金融業界でブラックリストに載るまでになっていた。

その男を人は呼ぶ。まるでダメなオッサン……マダオと。

その男……長谷川泰三。

*

空は相変わらずどんよりとしており、いつ雨が降ってきてもおかしくない天候だ。

お天気お姉さんである結野クリステルの天気予報は見事に的中している事になる。

坂田銀時と長谷川はかぶき町の大通りから場所を変えて、徳川家康像が立っている公園へと来ていた。

デートの待ち合わせなどでよく使われる場所である。

銀時と長谷川は公園の中に数あるベンチのひとつに座っていた。

「それでさ長谷川さん。奥さんとはどうなの？」

銀時がかぶき町の通りで聞き損ねた事を再度訊ねる。

「まあ……、ちよくちよく電話はしてるよ。三週間に一度くらいの割合でね」

「毎日借金取りから逃げてます、て？」

「言わないから！何でわざわざ別居中の妻に、そんな自分の恥部さらさなきゃいけないの！俺、マダオだけどマゾじゃないからね！」

銀時の一言に長谷川はベンチから立ち上がって反応する。

「ごめんごめん。そうだったよな。長谷川さんは人生そのものがDMだもんね」

「違うから！さっきから俺はMじゃないって言ってるじゃん！！」

銀時の第二撃も長谷川は返した。

「ハツと話す内容って言ったら、健康管理とかそんな社交辞令じみた事かなあ。あとは……」

長谷川は平静を取り戻しながら、ベンチに腰掛ける。

「毎晩古本屋で買ったエロDVDを見ながらお前を想像してる、と」

銀時は首をバキボキと鳴らしている。

「しないよ！俺、どこまで欲求不満なワケええええ！？エロDVD見ながらハツの事想像するなんてどんだけ飢えてんだよおお！！」

「飢えてないの？」

銀時は「意外だ」と言いたそうな表情をした。

「飢えてないから！で、銀さん。相談って何よ？」

長谷川は残り少ない煙草を啜えて、以前に道に落ちていた百円ライターで火を点ける。

「長谷川さんさあ。入国管理局の局長だったじゃない？だったらさ、やっぱり夜な夜な天人と接待とかあったわけだよな？」

「まあね。毎日ってワケじゃないけど警護対象の天人と飲めや騒げの経験はあるよ。それがどうしたの？」

長谷川は煙草を吸ってから、ふうーと吐く。

口から煙が吐き出され、空へと向かっていく。

「その中でさ、酒を飲まずに相手ともてすなんて事したことある？」

銀時は腕を組み、足を組んでの姿勢で長谷川に訊ねる。

「あー、そうになると天人相手じゃなくて酒飲めない部下におごってやった事は何度もあるなあ」

長谷川は過去の出来事を思い出すように煙草を啜えてから、吸って煙を吐き出していた。

*

それは江戸のどこかにある飲み屋。

入国管理局時代の長谷川と部下と思しき若い男（頭はマゲで口にはヒゲも生えている）が、向かい合って注文した品を箸でつつきながら会話を弾ませていた。

部下の名前は錨いかりという。

どうも妻と愛人の板ばさみにあつててんてこ舞いらしい。

酒でも飲めば憂さを晴らせられるのだろうが、この錨いかりという男。顔に似合わず下戸げこ（意味：酒の飲めない人、酒の嫌いな人）なのだ。

「局長」。俺はどうしたらいいですかねえ」

職場で上司にお小言言われて、家に帰れば愛憎渦巻く修羅場地獄の中である。

気の弱い男なら即座にこの世からの退場を選ぶだろう。

「まあ愛人と別れて、奥さんにやり直してくれって言つのがベタじゃないのか？」

長谷川は三角形で最も模範的な解決案を言ってみる。

「なお子と別れて、ゆいに頭を下げるんですか？」

「お前、確か俺と同じで婿養子だろ？早い内に謝っておいた方がいいぞ。伸ばせば伸ばすほどこつこつ事ってこじれてくるからなあ……」

長谷川は錨が何故愛人を作ったのかは何となくではあるが理解でき

ていた。

婿養子とはいわば、一か八かの賭けだ。

勝てば、可愛がられて将来もウハウハな人生を満喫できるだろう。しかし負ければ一生、妻もしくは妻の実家のペットとして飼い殺される日々の毎日だ。

錨はこの勝ち負けで言えば、『勝ち』のはずだ。

だが『勝ち』だからといっても、先程述べたものはあくまで上辺だけだ。

実質は婿養子に勝ち負けはないのかもしれない。

妻に気を遣い、妻の両親にも気を遣わなければならないし、富や権力を手に入れたとしても自分で自由に出来る範囲は高が知れている。『約束された将来』のために支払った代価は『自由』だと気付くのに時間は殆どかからないだろう。

だから錨は愛人を作って、現在に至ったのだ。

『自由』を得るために。

ガラツと飲み屋の引き戸が鳴った。

そこには二人の女性が鬼のような形相で入ってきた。

錨の妻と愛人だと長谷川は確信した。

妻と愛人は長谷川そっちのけで錨を挟んで揉めていた。

見ている側の感想としては『面白い』か『お気の毒に』の二つくらいしかないだろう。

積極的に他人の色恋沙汰に首を突っ込もうとするヤツはいない。

妻と愛人が怒りを引つ張り合いにしていた。

妻が右手を、愛人が左手を握っており、長谷川は右手に焼き鳥の串を持っていた。

しばらくはよくありがちな引つ張り合いをしていた。

錨の表情が何ともいえない顔になっていた。

業を煮やした愛人が厨房の中に入り込んで、包丁を手にして再度現れた。

妻は動揺し、錨は怯える。長谷川は空になった串を串入れの中に放

「え？そりゃあ……ちよつとね……」

銀時は内容を探られたくないのか、急に顔を明後日の方向に向けていた。

長谷川のサングラスがキラリと光った事を銀時は見落としてしまった。

「ははぁん。相手は女だねえ」

（このマダオ。こういう事に関しちゃう妙に鋭くなりやがる……）

銀時は長谷川の鋭さを甘く見ていた。

伊達に『人気投票篇』で真っ先に真犯人に気づいただけの事はある。だが、今の銀時にとってはその力は厄介な事この上ないのだが。

「しかもその女は下戸だから飲ミネーションは使えない。つまり今までのおもてなし方法だと相手を怒らせる可能性があるってところかい？」

長谷川は「どう？俺の推理」とでも言いたげな表情を見せてくる。

「ああ……。まあね」

（下戸じゃねーんだけどなあ。ただ飲ましたら俺は間違いなく天国へのプラチナチケットを手に入れちゃうんだよなあ）

あれでは下戸の方がマシだと思ってしまう。

「で、何かいい手ないの？俺の周りでこういう事に精通してそうなのって長谷川さんくらいだしさあ」

長谷川は右掌を銀時に向けてくる。

「何その手？」

「ここからは無料じゃなくて有料ってコト」

「ったく、しょうがねえなあ」

銀時は長谷川の掌に先程ほじっていたハナクソをなすりつけた。しかも結構大きいサイズを。

「ぬあああああああ！！何してくれてんのおおおおおお！！！」

長谷川は掌に乘せられたものを見て叫びだす。

「だから報酬」

「いらねえよおお！！誰が報酬でハナクソもらって喜びヤツがいるんだよおおお！！」

「長谷川さん。常に食糧危機に追い込まれてるじゃない？だから、その足しになるかなあと思って……」

「なるわけねえだろおおお！！ハナクソ食べたってHP回復なんてできねえよ！！屈辱と羞恥心がアップするよ！！」

長谷川は掌に乗っているハナクソを叩き落としながら叫ぶ。

「銀さん！頼むよおお！！何でもいいからHPとMPを回復させるアイテムくれええ！！」

この場合のMPが何なのかはわからないが、銀時は重い腰を上げることにする。

「ちよつと待つてなよ。買ってくるから」

銀時は不本意ながらもアドバイス料として長谷川にカップ酒と煙草を一つ買った。

「かああああ。やつぱりコレだねえ。HPもMPも回復したって気になるぜえええ」

長谷川はカップ酒を煽って、オヤジ的な感想を述べる。

「で、長谷川さん。報酬払ったんだから教えてくれるんだろうかねえ？」

銀時としてもこの予想外の出費を死に金にするつもりはない。

「酒がダメとなると、料理でもてなすしかないんじゃない？銀さん、確か料理は出来るんだったよね？」

「まあ一通りはね。よつぽど凝ったものでない限りは何でも出来るけどね」

「だったら、それでいいじゃん。おもてなしの受け止め方なんて千差万別だよ。どれが正解なんてないんだしさ。案外料理だけで大成功なんて事もあるんだしね」

長谷川は煙草の箱を開けながら、一本取り出して啜える。

（久しぶりにデキる銀さんでも、あのアバズレに見せてやろうかねえ）

「それじゃ長谷川さん。俺戻るわ」

銀時はベンチから立ち上がったて、公園を出るために歩き出す。

「銀さん。また飲みに行こうぜええ！」

長谷川の声を聞きながら、軽く手を上げて応えた。

*

夕方となり、吉原はこれからが本来の姿を出そうとしている頃だ。

『ひのや』も書き入れ時を過ぎたのか、訪れる客の数がまばらになつていた。

（そろそろ店じまいかねえ）

日輪は車椅子を巧みに操りながら入口前に立ち、息子と娘兼妹分の帰りを待っていた。

（こんな風に誰かの帰りをのんびり待つ事が出来る日が出来るなんてねえ）

鳳仙に支配されていた時にはとても考えられなかった事だ。

一人分の茶を淹れて、ずずーっとすすする。

「はあ」

一息ついて、晴太と月詠の帰りを待つ。

「日輪様」

その中、遊女とは違うが吉原の住人が日輪の前に現れた。吉原自警団『百華』の一人――おかたである。

彼女の手には分厚い書類が握られていた。

「『百華』一同及び遊女達にも今回の件を話したら、この通りになりましたあ！」

ドンと床机しょうぎの上に置く。

日輪の書類の一枚を手にして、中身を見る。

中身は『月詠の三日間の休暇についての署名』である。

一枚につき、数十人の名前が署名されていた。

それらが目分量で見ても二十枚以上となっている。

「予想はしてたけど、凄いやねえ」

「皆、頭には感謝してるからこんな事で役立てるなら喜んで手を貸すって言って快く書いてくれましたよ」

おかたは署名の際の出来事を思い出していた。

「日輪様、頼まれていたモノ持つてきましたあ。皆さん、頭の事になると我先に署名してくれましたよあ」

『百華』の一人、おなぎもおかた同様の書類を数十枚持つて『ひのや』に入ってきた。

「まさに上首尾（意味：物事がうまく具合に運ぶ事）だね」

日輪は労を労うために、二人分の茶を淹れる。

「ごくろうさん。はい、これで休んでおくれ」

「あ、ありがとうございます。日輪様」

二人は日輪の行為に甘え、床机に腰掛けて茶をいただく事にした。

「母ちゃん。ただいまあ！」

年齢にして十にも満たない少年が、『ひのや』に入ってきた。

日輪の息子の晴太である。

「おかえり晴太。夕飯はもう少し後になるけどいいかい？」

日輪は笑顔で息子を迎える。

「うん。あ、そうだ。こだち姐からコレ預つてたんだ」

晴太は懷から、おなぎやおかたが持つていた書類を日輪に渡した。

「ねえ母ちゃん。ソレ何なの？たくさん人の名前書いてあつたけど」

「ああ、これはね。月詠にお休みを与えるためのモノさ」

日輪は晴太の質問に正直に答える。

「でも、月詠姐がそんな紙見せられたくらいで休むのかなあ……」

晴太にはこの書類がどれほどの効果を持つのかはわかっていないようだ。

（何故じゃ？『ひのや』に戻るとよくない予感がする……）

吉原の見回りの中、時間が来たので『ひのや』へと戻ろうとする月詠に第六感のようなものが働いた。

この勘は命を懸けた切り取りの中で重宝するので、月詠自身も信賴している。

煙管の吸い口を咥えてから一息吸い、ふーっと紫煙を吐き出す。勘なので、言ってしまうえば抽象的なものだ。

『ひのや』に戻ると、自身に不利益な事が起こるとは何なのだろうかと考える。

（まさか、わつちを恨んでいる者が日輪や晴太を人質にした！？）
月詠は第一にそのような想像をする。

『死神太夫』などと呼ばれている自分を恨んだり、憎んだりする者は多い。

そういった輩が自分に報復するために日輪や晴太を人質に取ったということは十分にありえる。

（いや待て。日輪や晴太が人質に取られているとなれば、『百華』の者がわつちに知らせてくるはず……。それがないとすると、わつちの思い過ごし……）

月詠は冷静に考えを働かせる。

では、何故よくない予感が自分に過ぎるのだろうか。

自分にとってよくない出来事を想像してみる事にした。

（まさか、銀時が女房を連れてきたとか……）

月詠はそのような事を想像してしまった。

今年の正月に貰った偽装年賀状（この作品も原作同様、サ。エさん方式を採用しているので当てにはならないのだが）を思い出す。

あの時、自分はまさに『この世の終わり』と思ってしまった。

思わず、日輪と晴太の年賀状をひたたくてあのように書き換えてしまったくらいだ。

その時は自分も内からこぼれようとしている感情を必死でこらえながら、書いたものだ。

（しかし猿飛には悪いが、あやつと一緒にいるとは思えん）

月詠がこのように思えたのは以前に銀時が猿飛あやめさるとひに対して行った行為を目の当たりにしたからだ。

抱きついてくる猿飛を何のためらいもなく、どこかへと投げ飛ばしたのだ。

仮に両想いだとしても、普通の愛情表現ではない。

月詠の恋愛観としては、両想いの相手とは『共に笑って人生を満喫している』というものだからだ。

（吉原でもあそこまで妙な性癖を持つものは見た事がないからの）
Mの性癖を持つ者は知っているが、猿飛程のドMは吉原にもいないと断言できる。

（ちよつと待て……。何故わっちは銀時に女房が出来たからといって、よくない予感の中に含んでおるのじゃ！？）

月詠は冷静になって今までの想像を必死で否定する。

（た、確かに……わっちは銀時を好いておる。しかし……）

一度、人前で自分の内なる想いを打ち明けたのだがそれを改めて自覚しようとすると思れが入ってしまう。

生来のスキルともいうべき『素直じゃない』が働いてしまうのだ。
（仮にわっちが銀時の事を想っていても、銀時はわっちの事をどうとも想ってはありんせん……）

そう考えてしまうと途端に寂しくなってしまう。

「帰ろう……」

月詠はこれ以上は悪循環に吞まれると恐れ、考える事を中断して『ひのや』への帰路を辿る事にした。

「ただいま」

「おかえり。月詠」

「月詠姐、おかえりい」

月詠が『ひのや』に戻ると、日輪と晴太が笑顔で迎えてくれた。

（わっちの勘も外れるのかもしれない）

所詮は戦闘で磨かれたものなのだから、日常で外れても仕方がないと納得する。

ちやぶ台の上に本日の夕食が出来上がっており、三人分ある。

ご飯と味噌汁とカレイの煮付けだった。

日輪が茶碗にご飯をよそおっていく。

「晴太、月詠。手は洗ったかい？」

「洗ったよお」

「わっちも洗ったぞ」

日輪の言葉に晴太と月詠も即座に返す。

三人がそれぞれの所定の場所に腰掛ける。

座り場所は誰かが決めたものではない。いつのまにかそのような
つていたのだ。

「……いただきます」

三人は揃って合掌して、夕食に手をつけ始めた。

日輪はガツガツと食べている晴太を見ながら食べていた。

月詠は料理を一品ずつじくりと味わって食べていた。

最近、見つけた彼女の密かな楽しみだったりする。

数分経って、ちゃぶ台の上に出ている食器がすべて空になると三人
は、

「……ごちそうさまでした」

と言って合掌した。

食器の片付けは晴太か月詠の役割となっており、今日は晴太が受け
持っていた。

「月詠。あんた確か明日の夕方から休みだったよね？」

「ああ。明日の夕方から明後日の夕方までになっておるが、何か問
題でもありんしたか？」

日輪が確認するように言ってくるので、月詠は思い出しながら答え
る。

「いえね、あんた明日の夕方から三日間。休みになったから」

「は？」

日輪のさらっと言った一言に月詠は耳を疑う。

食後の一服を決め込もうと思った月詠は思わず煙管を銜える事をやめる。

「何を言っておるのじゃ日輪。そんな事がまかり通るわけないじゃろ？」

月詠の言葉に日輪は笑みを浮かべている。

「ふふふ。あんたなら間違いなくそのように返してくると思ってい
たわよ」

予想通りに物事が運んでいるのが面白いのか日輪は笑みを浮かべた
まま、ある物を月詠に見せた。

月詠に見せた後、日輪はちゃぶ台の上にドンと置く。

日輪から受け取った書類を月詠は目を通す。

「な、何じゃ！？これはあああああ！！」

月詠は何のための書類かを確認すると、目を大きく開いて声も荒げ
てしまう。

これは自分の休暇に対する嘆願書なのだから。

手にしている嘆願書から目を離して、ちゃぶ台の上に乗っている嘆
願書の束を見る。

「あんたが三日間、休む事にみんなが賛成してくれたってワケさ」

日輪がこれを機とばかりに攻めの態勢に入る。

「しかし日輪、わっちは……」

月詠は折れない。

「まあ休みを薦めるたびに言うあんたの常套句は、正直言つと聞き
飽きちまったからね。だから今回はこういった事をさせてもらった
のさ」

「……………」

月詠は何も言わない。というより言い返せないのだ。

（日輪め、わっちに休ませるたびに外堀を生める策を出たでありん
すか……）

口喧嘩で日輪に勝つ事は到底無理だ。

「あと、あんたがこの嘆願書を拒否した場合は吉原一同の思いを足

蹴にした事になるからね」

日輪は畳み掛けるように言った。

月詠は手にしている嘆願書をもう一度見てから、日輪を見る。

日輪は相変わらず笑みを浮かべている。

有無を言わせない迫力がある。

『怒り』の感情を剥き出しにして怒ってくれた方がまだマシに思えてくる。

（銀時、ぬしはいつもこのような気持ちで日輪の笑みをみていたのじゃな……）

月詠はこの時、初めて銀時の気持ちが理解できた。

「わ、わかった。明日の夕方からの三日間の休暇、承であります」

……」

月詠は遂に屈した。

「よかったわあ。あ、あとね。あんた休暇の間は地上で休むこと。

間違っても吉原に帰ってきちゃいけないからね」

日輪は更に追い討ちをかける。

「それでは、わっちはどこで寝泊りするのじゃ？もしかしてダンボール一つに公園で過ごせというのか？」

月詠は三日間の逗留場所はどうなっているのかを訊ねる。

ハッキリ言って宿泊してくれるありがたい伝手を自分は持ってない。

「それも大丈夫。ちゃああんと泊めてくれるありがたいああい伝手に頼んであるから」

日輪は笑みを浮かべている。

「いつの間にそんな伝手を作ったのじゃ？」

「何ボケた事言ってるのさ？あんたもよああおおく知ってるところじゃないさ」

日輪の言葉に月詠の全身に冷たいモノが駆け巡った。

ああ、できれば嘘であってほしいとそのような考えが出てくる。

「あんたは三日間、万事屋で寝泊りするんだよ。銀さんには既に話

をつけてあるからね」

「何じゃとおおおおお！？」

月詠は右手に握られていた煙管を畳の上に落とし、今までにないくらいに声を荒げた。

第六感の間違っていたのだ。

第四訓 「ご利用は計画的に。計画は完璧に」(後書き)

次回予告

第五訓 「もてなす側も、もてなされる側も気を遣う」

第五訓 「もてなす側も、もてなされる側も気を遣う」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

前回のあらすじ

銀時「えー、前はマダオがマダオしてマダオしました。終わり」

新八「何さらつと嘘ついてんだあああ！マダオがマダオしてマダオしたなんてどんな頭のキレる読者でもわかるわけねえだろおおおー！！」

神楽「本当の前回のあらすじはマダオが現れて銀ちゃんにハナクソもらってたアルよ。んでツッキーがお休みもらうことになったアルね」

新八「神楽ちゃん、間違っではないけど端折ってない？」

銀時「というワケで銀魂　く銀色の魂は決して折れず　始まります」

第五訓 「もてなす側も、もてなされる側も気を遣う」

特定の他者に対して執拗につきまとう行為を行う人間がいる。

自信・自負心が強く、拒絶した相手にするものが多く、行動的な分類からは『挫折愛タイプ』に属するというナルシスト系（自己愛性人格障害）がある。

一九九七年にそれを題材として放映されたテレビドラマでは平均視聴率十九・二%を出している。

最高視聴率は二十五・六%を叩き出すほど注目されており、社会問題としても深刻に取り上げられていた。

『銀魂』の世界にもそれは確実に存在している。

その名は『ストーカー』という。

*

『万事屋銀ちゃん』はある意味では年中無休であり、ある意味では年中有休でもある。

経営者である坂田銀時が営業活動をあまりしないから、基本的には『請け負い』の態勢を取っている。

この態勢を取っていると例を挙げるなら一年間、依頼人が依頼を持ち込んでこなかった場合は年中有休になってしまうわけだ。

だが、『万事屋銀ちゃん』には何だかんだで依頼をしてくる者は少なくはない。

中にはとんでもなくヤバイ出来事に発展してしまう依頼もあったり

もした。

とある仕事場で人手不足で借り出されて、助っ人要員になる事が今の『万事屋銀ちゃん』の業務スタイルだ。

現在午前十時とジャスタウェイ時計が針を指しており、日頃二日酔いでグダグダになっているか依頼がないからといって惰眠を貪っている生活を送っている銀時はキチンと起床していた。

通いで訪れている志村新八もすでに入社（仕事がないといっても、会社であるため）しており、長椅子に座って人数分のお茶を淹れていた。

『万事屋銀ちゃん』で銀時と共に生活している神楽は酢昆布を噛みながら、新八の向かいにある長椅子に座っていた。

「あー、お前等。今日の夕方から三日間、日輪の依頼でアイツが泊まりに来るからきちんとおもてなしするように」

銀時が昨日引き受けてきた依頼をいつもの口調で従業員二名に命じた。

「無理です」

「無理ネ」

新八と神楽は即答でしかも揃って拒否の言葉を口に出した。

「オイオイ何だよ？お前等もしかして一人前にストライキでもしようってんですかコノヤロー！」

従業員二名に対して、ダメ経営者が吠える。

「違いますよ。僕今日の夕方から三日間、タカチン（タカティンではない）達親衛隊と強化合宿なんですよ。だから、お休みをもらいます」

新八は律儀に休暇届まで提出した。それだけ今回の休暇に関して本気なのだという事は銀時にもわかる事だ。

「お休みってマジ？新八君」

「マジです」

銀時としても日頃から無理・無茶・無謀の三拍子に付き合わせているため、たまーには休ませてもいいかと仏心を出す事にした。

「しょうがねえなあ。オイ新八」

「何ですかっつわっ!？」

銀時は懷から茶封筒を取り出して新八に向かっ投げつけた。

新八は戸惑いながらもしっかりと受け止める。

「とりあえず、給料だ。ありがたく受け取るように」

銀時は上から目線で言い張る。

さながら、皇帝が奴隷に対して自分が先程までほじったハナクソを与えるようにだ。

「ちよつと待てええええ!! 誰が皇帝で誰が奴隷だあああ!! ありがたく受け取るようになって偉そうな事言ってますけど、アンタにそんなこと言う資格があると思ってるのかあああ!!」

新八の言うように、何ヶ月も未納にしているダメ経営者には言う資格はない。あと、地の文の内容にまでツツコミを入れるのはやめてほしい。

「とにかく銀さん、ありがとうございます」

新八は給料が入った茶封筒を懷の中に収めながら、感謝の言葉を述べる。

「つと、とりあえずオタクダメガネは片付いたと。んで神楽、オメーは何で無理なんだよ?」

新八の件はこれで片付いたと判断した銀時は

「私も今日の夕方から三日間、姉御と一緒に九ちゃんの所で遊び倒す約束してるアル。だから給料よこすネ」

神楽の言う『姉御』とはメスゴリラもとい新八の姉である志村妙しむらたえであり、『九ちゃん』とは柳生九兵衛やぎゅうきゅうへえの事だ。

「はあ? 遊び倒すだあ? たく九兵衛だけならともかく、お妙もいるんじゃキャンセルもできねえじゃねーか」

九兵衛だけなら得意の屁理屈で何とでもなるが、そこに妙が加わる
と厄介な事この上ない。

日輪は笑顔で有無を言わなくするが、妙は説得がダメなら武力で自身のワガママを貫こうとするからだ。

銀時は諦めたのか、懷から茶封筒を神樂に投げつけた。

神樂は新八より華麗に受け取る。

「これで姉御と九ちゃんに酢昆布買つてあげられるネ！銀ちゃん、これからも私に給料払えるように精進するヨロシ」

神樂は上から目線で言い放つ。

「オイ待て。神樂、何でオメーは従業員なのに上から目線で言ってるの？」

「銀ちゃんもちっちゃいアルなあ。ちょっと問題のある従業員を飼いなせないようじゃ器は知れてるネ」

「神樂ちゃん。それじゃ自分が問題児だつて言ってるようなもんだよ」

神樂の言葉に新八がツツコミを入れるのを忘れるわけがなかった。

「とにかくオメー等。出かけるまでの時間はキリキリ働けよ？新八、神樂。オメー等はこのメモに書いてあるものを買つて来い。それと神樂、金が余つたからつてつり銭で余計なもの買うんじゃねーぞ。自分の欲しい物は自分のお金で入手するよーに」

銀時は新八にメモとそのために必要なお金を渡した。ちなみにこのお金は日輪からもらった遊興費の一部である。

「……チツ」

神樂が舌打ちした。どうやら銀時の予想は的を得ていたようだ。

「神樂ちゃん！？」

新八は神樂がそのような事をマジで考えていた事に動揺を隠さなかった。

「銀さんはどうするんですか？まさか僕達に面倒事押し付けて自分だけ遊び呆けようなんて考えてませんよね？」

新八はメモにびっしりと書かれている内容に目を通しながら、その間に銀時は何をするのかを訊ねる。

「俺は三日分の食料の買い込みだよ。今日の夕飯は何するかは決めるが、後は考えてねーからな。とりあえず色々買つときゃ問題ねーだろ」

銀時の頭の中では様々な食材が浮かんでいるのだろう。

「銀さん。言っておきますけどそのお金で自分の食べたいもの（特に甘味）を買い捲る事はやめてくださいね。神楽ちゃんに言ったように自分の欲しい物は自分のお金で買って下さいね！」

「……………チッ」

銀時も舌打ちした。

「アンタ等、本当に考えてる事一緒だなあああ！！」

新八がそのように吠えるのも無理もないことだった。

*

時間的には昼となり、一体どのくらいぶりかはわからないがまともな昼食を食べ終えて軽く休憩を取ってから万事屋一同は仕事を行う事にした。

新八と神楽が共に買い物に行った後に銀時も『万事屋銀ちゃん』を出た。

鍵を閉めて、大江戸スーパーへと向かう。

買い込む量が少なければ愛車の原付に乗っていてもいいのだが、三日分の食料となると量は相当なものであり、原付のメリットは全くない。

大江戸スーパー入口前に立つとガーっという音を立てながら自動ドアが開き、銀時は店内へと入っていった。

買い物カゴを手にして、銀時は野菜売り場から必要なものであり、値段の安いものを搜していく。

「新八も神楽もいねーとなると買う量は減るなあ」

現在の自分家の高い数字を出しているエンゲル係数の大半を占めているのは神楽と定春の食料費が主だ。

そして、今日の夕方から三日間。神楽と定春はいない。つまり『万事屋銀ちゃん』のエンゲル係数は気休め程度には下がるということだ。

ニンジンにタマネギ、ネギにピーマン、もやしも買っておくことにした。

「おお、キャベツ二つでこの値段かよ。こりゃ買いだな」
迷うことなくキャベツ二個を買い物カゴの中に放り込む。

買い物を順調に済ませていきながら、銀時の手がぴたりと止まった。
（ちよつと待てよ。新八も神楽もいねーとなると、俺はあのアバズレと三日間過ごさなきゃならねんだよなあ……）

依頼を受けた時、銀時の予定としては万事屋一同総出でもてなすと計画していた。

そうなれば自分も下手に彼女を意識せずに済むという事だ。

（やべえええよおおー！！前の事を嫌でも意識しちまうだろうがああー！！）

前の事……いわゆる殺風景でもなく太夫でもない慈愛に満ちた表情で頭を撫でられた時のことだ。

（待て待て待てえー！！落ち着けええ坂田銀時いい。あの女に手え出してみる。二億という債務を背負わなきゃなくなるぞおおー！！）

二億なんて金、銀時の人生で生で見たことは一度もない。もちろん稼いだ事なんてあるはずもない。

間違つて、手を出してしまえば自分の人生にピリオドが打たれる事になるだろう。

そもそも二人きりになったからといって即座に『手を出す』という考えが一番最初に出てくる事が、今までの自分が知っている女性とは違う目で見ている何よりの証拠だったりするのだが、債務を背負わされる事で頭がいっぱいの今の銀時が気付くわけがない。

「……さん」

「いやいやいや、それじゃ俺がアイツの事気にしてるみてーじゃんか。そんな事ないよ。俺はみんなの銀さんだから、一つの安らぎの場所なんていらなんだってえ……」

背後から誰かが呼んでいるのだが、銀時の耳には入らない。しかも

腹の中で考えている事を口に出す始末だ。

「……さん！」

「でも、アイツがどおおおおおしてもって言うんだったら、考えてやらねー事もないんだけど……」

背後の人間は先程よりも大きい声で呼ぶが、それでも銀時の耳には入っていない。それどころか口に出している内容も自分に都合のいいようになっっていたりする。

「銀さん!!」

「あん？」

ようやく銀時は妄想世界から現実世界へと戻ってきたらしく、後ろを振り向くと武力行使前の和服の似合う美人――妙がいた。

彼女がいくら暴力的とはいえ、即座に下すわけではない。

一応『警告』のような台詞を出し、それを守るか守らないかで下すようにしているらしい。

尤も、彼女の武力の被害に遭っている面々にとってはそんな裏事情はどうでもいいのだが。

「さっきから一人で何をブツブツ言ってたんですか？ 気味悪いですよ」

妙が買い物カゴを持って、呆れていた。

その中には十個入りの卵パックが入っており、銀時は一瞬でそれで妙が何をするのか理解できたが口には出さなかった。

（神楽あ、すまねえ！ お前が死んだら酢昆布をたらふく棺桶の中に入れてやるからなあ！！ だからこの世に未練タラタラ残さずに成仏しろよおお！！ あと絶対に幽霊スタンドになつて俺んところは来るんじゃないやねえぞおおおお！！）

銀時は神楽の冥福を祈ろうとしていた。

妙が作る玉子焼き（通称：可哀相な卵、ダークマター暗黒物質）はとても料理と

呼べるものではない。

妙自身は自分で食したこともないのか、何の迷いも躊躇もなく笑顔で差し出してくるのだから恐ろしい。

妙に暗黒物質を出された場合、自分が助かる方法としては『誰かに食べさせる』がベストの選択だ。

「料理を作る」と妙が言い出した場合の方が、被害者を激減させる事が出来る。

何故なら妙は『自分の身を案じてくれる言葉』というものに弱いからだ。ここで上手く言えば調理を留まってくれる確率が上がったりする。

こればかりはその時にならないとわからないものだ。

神楽の運に懸けるしかない」と銀時は考えを打ち切った。

「銀さん。お買い物ですか？」

「ああ、今日客が来るからな。神楽と定春、お前と一緒に九兵衛ん家に行くけどよろしく頼むわ」

銀時は短く答えた。

「ええ、わかっています。三日間でしょ？任せてください」

妙はニツコリと笑みを浮かべて了承する。

「んで、お前ここには何しに？柳生家セレブじゃん。食い物なんて吐いて捨てるほど出てくるぞ。お前が買いに行く必要ねーじゃん」

「そんな銀さん。いくら九ちゃんの家がお金持ちだからって集りに行くわけじゃないんですから……。まさかとは思いますが、神楽ちゃんにタツパーを持たせたりしてませんよね？」

妙は銀時ならやりかねない事を言う。

「アイツも万事屋^{ウチ}の生活が骨の髄まで染み込んでるからなあ。もう本能的にやってると思うぞ。まあタツパーで詰め込んでたら見逃してやってくれや。俺達助けると思って」

銀時は神楽の行動を黙認してほしいと、妙に頼む。

妙はため息をつく。

「はあ、仕方ありませんね。わかりました。それじゃ私もお買い物続きなんでこれだ」

お妙は軽く頭を下げて、お菓子売り場へと向かっていった。

「お妙」

「何ですか？銀さん」

「ストーカー撃退には苦勞するよな」

「ええ。そうですね」

銀時と妙は意味深なやり取りをして背を向けた。

妙の姿がいなくなつてから、銀時はめんどくさそうな表情で後頭部をわしゃわしゃと掻きながら口を開く。

「オイ、いるんだろ？出てこいよゴリラ」

その言葉を待つてましたと言わんばかりに、バナナ売り場に置かれているバナナがボトボトと床に転がり落ちていき、何かが飛び出した。

飛び出したのは銀時よりも大柄の男であり、江戸の治安を守る特殊警察『真選組』^{しんせんぐみ}の制服を着ていた。

『真選組』局長のゴリラである。

「ちよつとおおおおお！！何で俺だけ紹介が他の連中より手抜きなの！！ちゃんとやってよ！折角トシや総悟よりも早く出てるのにさあ！！！」

『真選組』局長で『スパイ。ーマン』的物件や『ザ・ライ』的物件に絡まれた経験のあるゴリラである。

「だからゴリラから離れてって言つてるじゃん！！よく自分で言ってるけど他人に言われて嬉しいわけじゃないからねええ！！しかもどうでもいい事教えてないで肝心な事を教えてあげて！主にこの作品呼んでくれている読者の皆様にいい！！！」

地の文相手にツツコミまくっているこの大男は『真選組』局長の近藤^{ゴリラ}藤^{こん}である。

「最後の最後までゴリラから離れようとしないうね！？何！？俺とゴリラは一万年と二千年前からの関係だって言いたいのおおお！！？」

「オイ、ゴリラ。お前いい加減に地の文相手にツツコミするのやめろ。他の連中の目え見てみる？」

銀時は近藤に周りをみるように見てみる。

ヒソヒソ話をする主婦達。

子供が近藤を指差している。

危険人物を見るようにして遠ざかっていく人達。

色々ではあるが、共通点があるのなら全員が侮蔑と軽蔑の眼差しで近藤を見ているということだ。

地の文にツッコミを入れるということは透明人間にツッコミを入れるのと大して差はない行為だと近藤が知るにはさほど時間はかからなかった。

「あ、どうもすみませんでしたあ。決して怪しいものではありませんのでご安心くださいあい」

と愛想笑いを浮かべて弁解しようとするが、余計気味悪がつて店内にいる数人は店から出て行ってしまった。

銀時はわかりきっている事を聞くのも億劫なのだがそれでも訊ねる。「んでオマエは相も変わらず、仕事サボってお妙のストーリーキングか？懲りないねえ」

銀時は近藤がここにいる目的はわかっているし、結果もわかりきっているので呆れるしかない。

「何を言う！俺のはストーリーキングではない！！俺のはさしずめ『愛の追尾』だ！！」

近藤は恥ずかしげもなく、キツパリと言い切る。

「オマエ、その言い訳はナ。トの師匠が『覗きではない！！取材だ！！』って言うてるのと同じだぞ！」

銀時は近藤を睨みながら近藤の主張をバツサリと切った。

「ところで万事屋。お妙さんと先程まで何を話していた？」

「別に、ただの世間話だよ」

「今日の夕方から三日間、柳生家に行くと言っていたが？」

「聞いてたのかよ！？オマエ本当、金輪際『愛の。。。』には好きな呼び名を入れよう」なんて言うなよ！オマエの称号なんか『ただのストーリーカーゴリラ』で十分だ！！」

バナナ売り場に隠れて盗み聞きしていたのだろう。

「近藤さん。仕事サボってこおんな所にいたのかよ？ いい加減に仕事してくれよ。これ以上は俺もフォロし切れねえよ」

『真選組』副長であり、『フォロ方十四フォロ』という名誉（？）な称号まで持っているフォロの天才で、究極のマヨラー。
ひじかたとうしろつ
土方十四郎である。

「ったく、また鬱陶しいのがきやがった……」

「あん？誰が鬱陶しいだテメー。鬱陶しいのはテメーの頭だけで十分だ」

「近藤さん。買い物する気がねえなら屯所に戻ってくれよ。下の奴等にししがつかねえ」

「俺はアレが切れたからな。買い溜めに来たんだよ」

土方の言う『アレ』とは土方と付き合いのある人間なら誰でも知っているものだ。

銀時の一言で土方の額にビシッと青筋が立つ。

負けず劣らずの土方の返しに銀時の額にもビシッと青筋が立つ。

「犬の工サ食って幸せそうなツラしてるヤツに言われたくねーよ！」

!

銀時が土方を睨む。

「んだと！土方スペシャル愚弄してんじやねええええ！」

土方が睨みながらも銀時の胸倉を掴んでいた。

一触即発の雰囲気は二人を中心に店内にまで漂おうとしていた。

しかし、二人が殴りあいになる事はなかった。

何故なら店内にいるコワモテの店員がすんごい顔して睨んでいたからだ。

第五訓 「もてなす側も、もてなされる側も気を遣う」(後書き)

次回予告

第六訓 「気になる相手と一対一になると戦いと同じ」

第六訓 「気になる相手と一対一になると戦いと同じ」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

これから読もうとしてくれている皆様。

お気に入り登録してくれている皆様。

これからお気に入り及び感想を書こうとしてくれている皆様。

前回のあらすじ

近藤 「前は俺とお妙さんが晴れてゴールインを向かって…

…」

銀時&新八 「んなわけねーだろおおお!!」

二人の蹴りで近藤ぶっ飛ばされる。

土方 「前は万事屋がスーパーで買い物しているところを志

村姉

と出会ったり、その後で近藤さんや俺と出会ったりし

たん

だ」

土方は大まかな説明を終えると、煙草に火を点ける。

神楽

「銀魂 ー銀色の魂は決して折れずー 始まるネ」

第六訓 「気になる相手と一対一になると戦いと同じ」

その一、卵黄一個に対し、酢を大さじ一程度入れる。

その二、それをハンドミキサーなどで十分に攪拌する。

その三、卵黄一個に対し二百cc程度の食用油を少しずつ加えてさらに攪拌する。

その四、塩やうま味調味料などを好みで加えて味を整える。

以上、マヨネーズを家庭で作る場合の典型的な製法である。

マヨネーズをこよなく愛する者のために作られた新語がある。

悪食、ゲテモノ食い、味オンチとして使われることもある。

その言葉『マヨラー』という。

*

大江戸スーパ―

主婦と暇人と犯罪者が様々な思惑を抱きながらも、客として入店している。

坂田銀時は土方十四郎及び近藤勲と多少の口喧嘩の後、一人で食料の調達を続けていた。

「今日は奮発してすき焼きにでもするかあ」

現在の『万事屋銀ちゃん』の財政事情を考えると、『すき焼き』はかなり贅沢の部類になる。

日輪から貰った遊興費を使うのだから、銀時自身の財布は痛まないし美味しいものにもありつけるのだから実にありがたい事だ。買い物カゴの中には焼き焼きの材料になりそうなものはまだ何も入っていない。

「やっぱここはケチらずに牛肉だよなあ」

焼き焼にしたとしても、財布の紐を豪快に紐解くわけにはいかないのでメインとなる肉でさえ『牛肉』ではなく『豚肉』を使うことがほとんどだ。

他の具材はこの家庭でも用いるようなものばかりだ。

ネギ、糸こんにゃく、豆腐、鍋にしくための脂も必要以上に取っていく事も忘れない。

粗方のものを入れ終わると、今度はお菓子売り場に行く。

談話をする際のお供に使うものだ。

（アイツ、煎餅とか食ってたか？）

月詠が煎餅をかじっている姿を想像しようと思いができない。

むしろ、「何じゃ？コレは」と言う台詞が出て興味深そうに眺めている場面が想像できてしまう。

吉原を護る為に『女』であることを捨てたと公言するが、ついでに一般常識までも捨ててしまったのではと銀時は考えてしまう。

（俺にはどこからどう見ても『女』だがなあ）

ぱふぱふ状態で赤面し、胸を揉まれてジャーマンスープレックスを決める程のおぼこな彼女は間違いなく『女』だ。

容姿はもちろんの事、スタイルも一般女性の水準をいい意味で逸脱しており、吉原で育ったためか、町娘にはない色香を持っている。

男はもちろんの事、同姓である女性もつい魅了されてしまうものだ。『女』でいようとする者、『女』であり続けようとする者が喉から手が出るほど欲しがるようなものを彼女は持っている。

尤もそれを持っている月詠自身は全くといっていいほど自覚はなかったりするわけだが。

「とりあえず色々買っておくか」

銀時は買い物カゴ一つでは足りない判断し、入口付近まで戻ってシヨッピングカートと買い物カゴをもう一つ手にする。

二つの買い物カゴをシヨッピングカートに乗せて、手押し車のようにして押していく。

「後はつと……」

お菓子売り場で目ぼしい物を買ひ物カゴに入れてから、銀時は缶詰売り場へと移動する。

『宇治銀時井』を調理するために必要な食材、小豆の缶詰を見つけて数個放り込んでいく。

「あ、すき焼きのタレ忘れてた」

出汁として調味料を使う場合、醤油、砂糖、みりん、酒などを用いるのだが、今回ばかりそういうわけにはいかない。

もてなし相手である月詠は信じられないほどに酒が弱く、凶悪なまでに酒乱だからだ。

ウイスキーボンボンの入ったチヨコレートを一切れ食べただけで、「ヒック」というしゃっくりをあげてしまい、隣にいた神楽は絶望的な表情を浮かべ、「銀ちゃん。新八。成仏するネ」と心の中で祈ってしまうくらいだ。

もし、すき焼きの出汁として使った酒に反応して太夫になってしまった日には、おもてなしの会場が一瞬にして地獄の一丁目へと早変わりすることは間違いない。

そんな事になってしまったら銀時自身の命もそうだが、神楽の情報によるとバレンタインの時、太夫になってしまった事を橋の下で体育座りして凹んでいたという。

おもてなし相手を凹ませてしまったら、『万事屋銀ちゃん』の信用問題になる事は間違いない。

それに月詠の後ろには怖ああああい日輪までいる。

彼女を敵に回す事はなるたけ避けたい。特に金欠の時は『ひのや』でお世話になっている事から自身の生命を維持させるためにもだ。だからこそ、銀時は本来は使わない『すき焼きのタレ』を使う事に

したのだ。

いくらなんでもこれで太夫になってしまった日にはどうしようもないわけだが。

買い物カゴに放り込むと、隣ではボトボトボトというような音が聞こえたので顔を向けると土方がマヨネーズを衝動買いしていた。銀時と土方の目が合う。

途端に双方同時にすごおおおおく嫌な顔をしていた。

「ったく、オメーのカゴのマヨネーズから声がしてくるぜ？助けてえ、こんなニコチンマヨラーに食べられたくないよーってな」

銀時が先制攻撃に出た。

土方に額に青筋が浮かび上がり、精神的にダメージを少々受けるが銀時を睨みつける。

「フン、それだったら俺はテメーの買い物カゴの食材の声が聞こえてくるぜ？こんな壊滅的な味覚しかない天パの胃袋の足しになるなんて嫌だあああつてな」

土方は銀時に負けず劣らずの攻撃を繰り出す。

だが、銀時は余裕の表情を保っていた。

虚勢によるものなのか、本当に余裕なのかは土方としても判断しかねるところだ。

「残念でしたあゝ。この食材は俺だけのモノじゃないんです」

銀時一人が食べるのならば土方の言葉にダメージを受けていたが、自分だけが食べるものではないのでダメージは受けていない。

「言っておくが万事屋。メガネやチャイナ娘ならカウントなしだ。

テメー等は三人で一人みてーなもんだからな。キング。ドラが頭一本だけでうるついてたら、おっかねえだろうが」

「俺達を松井じゃないゴ。ラと散々戦った怪獣と一緒にすんじゃないよ。てか、こんな怪獣今時の読者が知ってるのかどうかさえ不安になるけどな」

「怪獣ファンで銀魂ファンな読者が読んでくれるかもしれねーだろ」
ここでいつもなら土方は煙草を口に咥えてふかすのだが、店内禁煙

のスーパーであるため吸わないようにしている。

いくら上司がストーカーで部下がドSというバカの集まりだとしても、自分が常識や良識を切断してもいいという理由にはならない。

「客が来るんだよ。客がな。それに仕事も絡んでるんだ。報酬を前金で貰ってる以上へマするわけにはいかねえんだよ」

「接待が仕事か？」

「まーな。だからテメーみてーなマヨ方十四マヨと遊んでる場合じやねーんだよ。オラ、とっとと消えろ。店内のマヨネーズ買っついていから」

「何、人を犬みたいに追い払おうとしてんだよ！テメーは！！テメーが消えろよ！店内の甘味独り占めしていいから！」
売り言葉に買い言葉の繰り返しである。

この二人が一對一になると大概こんな感じだ。

「それよりテメーんところの放し飼いになってるゴリラはどうしたんだよ？飼い主がキチンとみとかねえと訴えられるぞ？」

離れた時、土方と近藤は共に行動していたはずだ。だが、今は土方一人となっている。

「ゴリラじゃねえ、近藤さんだ。あと俺は飼い主になった覚えはねえ。近藤さんなら志村姉のところに行っているハズだ」

「あ、そ」

土方の回答は銀時の予想の範疇内なので、驚く事はない。

そして志村妙が近藤に襲われる事も心配してはいない。

妙は外見とは裏腹に、弟の志村新八にさえ『ゴリラ』と公言されているほどの凶暴性を秘めているのだ。

過去、近藤の妙に対するストーカー行為が成功した試しは一度もない。

「万事屋」

土方が喧嘩腰ではない口調で銀時を見た。

「何だよ？」

銀時は面倒臭そうに土方を見る。

「何で俺達だけが親父を見ることが出来たんだろうな？」

土方は買ひ物カゴの中に入っているマヨネーズを見ている。

「……急に何だよ？もしかして夢にでも出てきたか？言っておくが俺が引き受けるのは現実世界での依頼だけだからな。夢の中での出来事は夢を見たテーマで解決するように」

銀時は突き放すように言う。実際、茶化すように言っているがこれが銀時の虚勢である事は言うまでもない。

土方の言っている『親父』とはほんの少し前に逝去した定食屋の店主の事だ。

銀時の『宇治銀時井』や土方の『土方スペシャル』も気前良く出してくれるという稀有な人だった。

「違いーよ！夢で見るかよ！あんなハードボイルド幽霊！あの葬儀の場で何でよりによって、俺とテーマなんだよ？ご家族いただろ？しかも最後辺りは礼言ってくれたけど、そこに至るまでの過程はどう見ても俺達にとっては人生弄ばれてるようにしか見えなかっただろ？」

土方としては自分は最も相談したくもない相手だ。清水の寺から飛び降りる覚悟は必須だろう。

「……できる限りは思い出したくもねーんだけどよ。俺はあの親父とハードボイルド幽霊スタンドが同じ人物だなんて事自体がありえねーと思っちまうぞ」

「万事屋、理屈としては十分にありえるんじゃないのか？どんな善人だって悪人の顔があるようにな」

銀時の否定を土方は打ち消した。職業柄に出てくる土方なりの論理で。

「じゃあ何か！？あの親父は笑顔で俺達に料理を渡しながら、あんな顔を内面に秘めてたつてのか！？そっちの方が恐ろしいわー！」
銀時は土方の論理はあながち間違っていないと思いつつも、認める気にはなれなかった。

「話が脱線しすぎたな。で、万事屋。率直な意見を聞かせろ。この

一件でしがらみなく話せるのは体験者であるお前だけだからな」

土方は銀時に結論を求めた。

「親父も言ってたじゃねーか。俺達なら愉快に葬式を終わらせてくれるってよ。それが答えじゃねーのか」

「だから何で俺とテメーなんだよ？ハッキリ言えば愉快に盛り上がらせるなら俺やテメーより適任はいたぞ？俺んところじゃ近藤さんや総悟、テメーんところじゃあのチャイナ娘がいるじゃねーか？」

土方は新八を入れてはいなかった。彼がツツコミ要員だと見ているからだろう。

「確かにテメーが言うようにあそこに俺やテメー以上のバカはいたさ。だが親父はそいつ等じゃなくて俺達を選んだんだ。親父は俺とテメーに期待したんだろーよ。きつと……」

銀時もいつしか真面目に答えていた。

「期待に応えられるのは俺とお前と見込んで、見えるようにしたって事か……」

土方も色々と気になるような部分はあるが、納得したようだ。

「ま、真相は親父にしかわからねー事だけだな」

銀時も土方同様に期待されたから、あの時親父の幽霊スタンドが見えたのだろうと考える事にした。

その方が自分としても都合がいいからだ。（靈感が強いと認めなくて済むため）

「あの蕎麦でも作ってみるか」

銀時と土方は揃って声をあげ、揃った足踏みでゆで蕎麦が売っている売り場へと向かった。

その表情はやはり嫌そおおおな顔をしていた。

*

空は茜色となり、カラスが人間を「下々の者め」と見下ろしながら翼を羽ばたかせている時間帯。

吉原にある茶店『ひのや』では日輪、晴太を始めとして『百華』の
数人が一人の人物を送ろうとしていた。

「行つてらっしゃい。月詠」

「月詠姐、知らない人達についていっちゃダメだよ？」

「「頭、後の事は私達に任せてください！」」

それぞれが月詠に向けて言う。

「では行つてくる」

月詠は煙管を咥えてお泊り道具が入ったバッグを手にして、地
上へと通じるエレベーターへと向かつて歩き出した。

ちらりと後ろを振り向いて『ひのや』を見る。

全員が手を振つて、見送つていた。

「わっちは上京する田舎娘ではないぞ……」

煙管を吸い、口から紫煙を吐く。

煙は空へと気ままにもくもくと昇っていく。

それ以上は何も語らずに月詠はエレベーターに乗った。

エレベーターの中には地上へと帰ろうとする侍だのワケありの人だ
のが乗っていた。

（男が殆どじゃな……）

吉原が解放されたといつても、遊女達が休暇で地上で遊興に耽つて
いるという話は不思議とない。

幼い頃に売られて、人生の殆どを吉原で過ごしている者達にとって
地上での生活に適應するにはいささか時間がかかるようだ。

（地上の文明は、わっちらの予想よりも遥かに早いからの）

月詠自身が感じている事はある意味では吉原の住人の大半が感じて
いる事といつても過言ではないだろう。

キィインという音が鳴つて、エレベーターが停まる。

扉が開き、エレベーターから降りると地上――江戸だった。

吉原よりハッキリと夕焼け空を見ることが出来る。

「さて、どうしたものか……」

このまま万事屋へ行つても構わないが、お泊りセットと身一つで世

話になるというのはどうにも月詠自身釈然としないものがあつた。物騒な職業には就いているが、根が善人である彼女だからこそこのように思うのだろう。

しばし、知識を得るといふ名目で店等を見渡しながら歩く。

月詠の目にある店が入った。

『ぶじ屋』と書かれている洋菓子店だ。

客は女性が多く、ごくわずかだが銀時と同様に甘味の魅力にどっぷりと浸かってしまった男性もいる。

（三日も世話になるんじゃ。菓子ぐらい持っていってもバチは当たらんじゃろっ）

月詠は世話になる代価として洋菓子を買っていくことにした。

店内に入ると、色々と並んでいる。

洋菓子系よりも和菓子系を食している月詠としては、どれを選んだらいいのか悩んでしまう。

「何にいたしましょうか？お客様」

店員がショーウィンドウに陳列されている商品を眺めている月詠に声をかけた。

「どれを選べばいいか……。すみません、この店で人気のあるものをください」

月詠は自分が変に選ぶより店員に選んだもらったほうが確実だと思い、そのように店員に告げた。

店員は快く応じて、店で人気のある商品を次々とトングで取り、トレイの上に乗せていく。

結構な数のようにも思えるが自分が一人で食べるわけでもないし、あげる相手はいわば重度の甘味中毒者だから問題ないだろう。

店員は紙箱の中に商品を納めていき、封を閉じる。

店員がレジを操作して、値段を告げる。

月詠は財布を取り出して、ポンと出す。つり銭が出ないピッタリとした金額で。

その後、「ポイントカードをお作りになりますか？」と訊ねられた

のだが頻繁に訪れる事もないと判断したため拒否した。

「ありがとうございましたあ」

背後から店員の声を聞き、月詠は『ぶじ屋』を出た。

『万事屋銀ちゃん』ではというと、銀時が最終確認を行っていた。部屋は寝室、風呂場、居間などすべて綺麗になっている。

新八と神楽に頼んでおいた物も既に置かれている。

月詠が使用する布団と、煙管の灰を捨てるための煙草盆である。

新八と神楽は未成年だからもちろんの事、自分も喫煙をするわけはないので煙草の灰を捨てるための灰皿系のものは所持していない。布団も自分と神楽の分はあるが、客人用というものは持ち合わせていなかったため日輪から貰った遊興費で購入する事にした。

就寝の際には和室の中央に衝立ついたてを置いて、仕切りにする。

昼間に買った食材はすべて冷蔵庫の中に入れてあるし、風呂も既に湯船を綺麗にしているため後は湯を入れれば終わりだ。

「飯も炊けてるし、カセットコンロも出したしガスも問題ねえな」

粗方準備が完了したので、銀時はテレビをつける。

新八と神楽と定春は自分達の用事のためにいない。

今、ここにいるのは自分一人だ。

「なーんか、久しぶりだなあ。一人つてのは……」

従業員やペットが増えた事で懐具合は寒くなる一方だったが、心は温かかった。

初代『万事屋銀ちゃん』の金丸かねまる、池沢いけざわ、古橋ふるはしと共に行動した時には得られなかったものだ。

尤も初代メンバーを事実上、解散に追いやった原因を作ったのは他ならぬ銀時なのだ。

金丸と池沢を橋の下の川に叩き落したのは一つの組織で派閥が出来て、内部抗争になることを恐れたため。（自分の目の前で乳繰り合っているのをムカついてやったというのが本音だったりする）

古橋とキャサリン的ポジションのホステスを先の二人と同じ様に橋

の下の川へと叩き落したのは、これもまた先の二人と同じ様に内部抗争が勃発する事を恐れたためである。（実は銀時はそのホステスを狙っていたのだが古橋に先を越された事がム力ついたため、嫉妬の炎を燃やして実行したというのが本音）

これで解散にならない方がある意味不思議なのが世の中、不思議な奇跡はそうそう起こらないので解散したのだ。

（神楽はお妙がいるから問題ねーし定春にしても神楽がいりや問題ねーだろ。新八は……、まあ何とかしてるだろ）

長椅子に寝転がって、テレビから流れてくる音声を子守唄代わりにしながら銀時は両まぶたを閉じてしまおうとする。

ピンポンとインターホンが鳴ったので、閉じようとする両まぶたを開いた。

長椅子から起き上がって首を二、三度バキボキと鳴らしてから玄関へと向かう。

引き戸のガラスから人影が映っていた。

「はぁーい」

ガラガラという音を立てながら、銀時は引き戸を引く。

そこにはお泊りセットを右手に、左手には『ぶじ屋』で購入したスィーツが入った紙箱が握られていた。

「よお」

「久しぶりじゃな」

両者共に心中を探られないように平静を装って挨拶をした。

第六訓 「気になる相手と一対一になると戦いと同じ」 (後書き)

次回予告

第七訓 「仕事中毒者と世間知らずは世事に疎い」

第七訓 「仕事中毒者と世間知らずは世事に疎い」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り登録してくれている皆様。

感想を書こうと思ってくれている皆様。

前回のあらすじ

土方 「前はスーパーで不本意にも遭遇しちゃった万事屋ともう既に逝つちまつてる親父の事について話してたってワケだ。そのあと何やら万事屋は誰かと会うみてーだったなあ」

役目を終えて一服決め込む土方。

新八 「さすが土方さん！前回のあらすじの紹介に関しても完璧です！」

まともな紹介に感激する新八。

銀時 「今回ダメガネとニコチンマヨは出演ませーん」

新八&土方 「何だとおおおお！！」

妙 「銀魂 ー銀色の魂は決して折れずー始まりますのでチャンネルはそのままお願いしますね」

新八 「姐上、チャンネルって何ですか？」

第七訓 「仕事中毒者と世間知らずは世事に疎い」

古くは寛永二十年（一六四三年）刊行の料理書『料理物語』に「杉やき」が登場しており、これは鯛などの魚介類と野菜を杉材の箱に入れて味噌煮にする料理である。

関東や関西など地域によって調理方法及び中に入れる具剤は異なったりする。

関東では定着するまでは『牛鍋』と呼ばれており、先にその名を用いた料理を世に出していたのは意外に思えるかもしれないが、関西だったりする。

とある家庭ではこの料理のためにプチ戦争が行われていたりする。

（業突張り共の醜い争いともいう）

その料理の名は『すき焼き』という。

*

江戸の空は絶賛茜色であり、カラスも下にいる人間及び天人達を見下しながら我が物顔で翼を羽ばたかせている時間帯。

「よお」

「久しぶりじゃな。これは土産じゃ。皆で食べなんし」

坂田銀時と月詠は短く挨拶を交わしながら、月詠は手にしている紙箱を銀時に渡す。

「おお悪いなあ。ま、入れよ」

銀時は紙箱を受け取ってから中に入るように促す。

「では厚意に甘えて」

堅苦しい言葉を述べながら月詠はブーツを脱いで中に入る。

「すまぬな。わっちの休暇に付き合わせてしまつて……」

「相変わらずの台詞だねえ、お前ボギヤブラリー貧困だつて言われるぞ？それに日輪から貰うものは貰つてんだから気にする事じゃねーよ。それよりもお前、あんま日輪や周りの連中に心配させてんじやねーよ」

月詠が申し訳なさそうに謝罪を言おうとするが、銀時は慣れた事兼仕事なのかいつものように喧嘩腰には言わないように心がけているのかデリカシーのない台詞は言わない。

「休んではいるぞ。だが休みの際に地上で起こつた事を日輪に話すとは何か口元を引き攣らしておつたな」

お泊りセツトを長椅子に置いてから、月詠自身も腰掛ける。

「そりゃ引き攣るだろーよ。休みのために地上来てるのに、そのたんにびに地上産のバカ達に振り回されてちや日輪じゃなくても、本当に休んでるの？つて聞きたくもならーな」

銀時は台所に向かい、茶を淹れ始める。

「すまぬ」

応接間に戻ってきた銀時は茶の入った湯呑みを月詠の前に置くと、彼女は感謝ともとれる言葉を述べてから手に取る。

茶をすすつてから月詠は周囲を見回す。

『万事屋銀ちゃん』の中に入るのは初めてではないが、違和感があった。

「新八と神楽はどうしたのじゃ？それに定春もおらんが……」

ここにいつものようにいるはずの眼鏡少年とチャイナ娘とそのペットである巨大犬がいない。

それが月詠が入って直後に感じていた違和感だ。

「ああ。あいつ等なら用事で三日間帰つてこねーぞ」

銀時は何事もないように答える。

「……何じゃと？」

月詠は両目を大きく開いてもう一度銀時に訊ねる。

「だーかーら、神楽と定春はお妙と一緒に九兵衛の家で遊び倒すんだってよ。新八は親衛隊と一緒に合宿なんだよ」

銀時も長椅子に座って、神楽及び志村新八不在の内容まで説明した。説明を終えると自分の分として淹れておいた茶を口に含む。

「神楽の方はわかりんしたが、新八の用事はわからぬ。何じゃ？親衛隊とは……」

芸能関係もとい地上の流行に疎い月詠がわからないのも無理のないことだ。

「あーお前、寺門通って知ってるか？」

銀時は後頭部を掻きながら、確認する。

月詠は首を横に振る。

「地上で有名なアイドルなんだけど、吉原風に言えば売れっ子の遊女ってところか」

銀時は何とか持てる知識を駆使して、なるたけわかりやすく説明しようとした。

吉原のもので例えて理解させるというのは我ながらナイスアイデアだと内心想っている。

「あいつはその追っかけをやってるんだよ」

しかし、新八の立場を説明すると骨が折れる。

（クソ！あのダメガネ！）

銀時はここにいない新八に毒づいてからどうしようかと頭を働かせる。

「追っかけ？もしかして『すーかー』なる者か？」

月詠の解釈に銀時は眉間に手を当てて唸ってしまう。

「側から見れば同じように見えるのは無理もねーけど違うからな」

銀時もまた結野クリステルの熱狂的ファンであるから、『追っかけ』と『ストーカー』を同一視されるのは気分のいいものではない。

「ふむ……」

月詠はとりあえず納得すると茶の残りを口に入れる。

「で、どーする？晩飯にするか？」

壁にかかっている時計を見ながら、銀時は訊ねる。

「まだ早いじやろ」

月詠も時間を見るが、明らかに早すぎると思える時間だ。

「ならテレビでも見るか？」

銀時は立ち上がってテレビに電源を入れる。

リモコンがないほどの旧型なのでわざわざ直に電源を入れなければならぬのが難点だ。

「銀時、そのテレビそろそろ買い換えた方がいいのではないか？確かもう一ヶ月くらいしかないんじゃないだろうか……」

「んな金あつたらとつくに買い換えてるつーの。てかお前、そーゆーのに関心ねーと思ってたけど……。なに『百華』の掟には七月二十四日までにテレビ買い換えないと処刑、とかあんの？」

「あるか！そんなアホな掟。つい前に『ひのや』に置いてあるテレビをデッキごと買い換えたのじゃから、それでの」

「ふーん」

銀時はまた長椅子に戻るが、今度は座らずに寝転がる。

テレビではマゲでスーツを着た男性二、三人と女子アナとも思える女性が一人がここ数日、江戸に起こった事をアナウンスしていた。

銀時はテレビに視線を向けてはいるが、いつもと対して変わらないようにも見えるが。

（やべーよ！何話したらいいかわかんねえよ！つーかこの部屋で女と二人つきりってあんまりないよね！？てゆーが大抵そういうのってシリアス篇ばかりで日常篇じゃ滅多にないよねえええ！！）

テレビから流れてくる声も銀時にとっては右から左に流れているだけで、何の効果もない。

気取られないように月詠を見る。相変わらずの銀時いわく『殺風景』なので内面に何を考えているのかはわからない。

（つーか何？この娘、相変わらずの殺風景じゃん！何！？前にあんな思わせぶりな事言っただけアレってもしかしてその場での『流れ』みてーなもんなの！？それに妙な期待を持った俺って新八や近藤以_{コジラ}

上の哀れなピエロってワケええええ！？）

相手の考えがわからないのだから否定的な考えにめり込もうとするのはある意味仕方ないのかもしれない。

否定的な思考を打ち消すように銀時は起き上がって、立ち上がってから軽く伸びをする。

背中がちよつとバキボキつと鳴った。

「銀時？」

先程までテレビを見ていた月詠が顔をこちらに向けた。

「晩飯の支度するわ」

そう短く告げると、銀時は台所へと向かっていった。

その足取りはどこか重いようにも感じたのは多分気のせいではない。

月詠はテレビの映像を焼き付けるようにして見ており、耳で流れてくる情報を得るという作業を必死で行っていた。

そうでもしなければとてもここにいれる精神状態ではないからだ。

（迂闊じゃった。あやつ等は三人で一つ、いわば三位一体こそが基本型だと思っておった。まさか二人が留守であるとは……。だ、だから何だと言っんじゃ！？ここににいるのはわっちと焼け野原じゃ！そうじゃ！ここににいる人間はわっちだけじゃ！今台所にいるのは人間ではありんせん！銀時ではありんせん！怪人『ヤケノハラ』じゃ！！）

銀時が聞けば完全に口喧嘩勃発の言葉だが、月詠の腹の中でのことなので起こったりはしない。

（仕事では何度か男と二人という事もあるんじゃが……。仕事抜きだとも落ち着かぬものなのか……）

それとも相手が好意を寄せている異性だからかという考えはあえて避けていたりする。

台所からリズミカルに包丁の音が聞こえてくる。

料理に関しては素人の月詠でもわかる。

（慣れておるの）

日輪が料理をこさえている時も包丁を使う際、このようにリズムカ
ルな音が聞こえてくる。

自分がまだ到達できない領域といってもいい。
気を紛らわせるために煙管を取り出す。

「ほれ、コレ使え」

銀時は作業を中断してわざわざ煙草盆を持ってきてくれた。

「すまぬ」

また銀時は台所へと戻っていく。

慣れた作業で準備を整えてから煙管を吸って、ふーっと紫煙を吐き
出す。

煙は天井へと昇っていきやがて目には映らなくなった。

煙管を咥えながら、テレビの元まで歩み寄ってチャンネルを切り替
える。

この時間帯なのかニュース番組しかない。

別段バラエティやドラマを進んで見ているわけではないので何を見
ても構わない。

（何が流行っているのかも知るのもいいことかもしれぬな）

先程までつけていたチャンネルに結局戻す。

現在男性ニュースキャスターが、江戸にある『真選組屯所』で前々
から騒がれていた強盗事件の事取材していた。

映像には『真選組』の隊士に囲まれて歩いている容疑者が連行され
ていた。

月詠は邪念が振り払われたのかそれとも、集中する事で雑念を近づ
けさせないようにする方法でも思いついたのか真剣にテレビを見て
いる。

「あ……」

容疑者（男）の顔が映し出されたとき、なんとも間抜けな声が出て
しまった。

「ん、どうしたあ？間抜けな声出してよお」

夕飯の準備を終えたのか銀時が台所から広間に戻ってきて、先程ま

で座っていた長椅子に座る。

「いや、この御仁。吉原で何度か見たことがあるものでな。遊女達の話では羽振りがいいからどこかの富豪かとも思ったのじゃが……。まさか、強盗をして手に入れた金で遊んでおったとは……」

「ふーん。まあ入れ込む気持ちはわかんねーわけじゃねーけどよお。強盗までして女と遊びたいのかねえ。夢に浸かりたいのかねえ。その辺はどう思うわけよ？吉原の住人として」

銀時が強盗を犯した犯人に呆れながらも、そこまでのめり込む男に愚か者対して吉原の住人の意見を求める。

「わっちに求められてものお。そもそも吉原には地上の法やしきたりは通じぬ事は主も知っておろ。地上でどんな方法で金を工面しても吉原で遊ぶならそれはやはり『客』でありんす。吉原で遊んだ後はどのように末路を辿るかは、わっちの知る由ではないがな」

啞えていた煙管を口から離して、煙管の雁首を逆さにして煙草盆にカンという音を立てて煙草の灰を捨てた。

「吉原で犯罪犯しゃ『百華』の標的で地上で犯罪起こしゃ『真選組』の標的かあ。完全に逃げ切るには宇宙しかねえなあ」

銀時はそのような事を口に出す。

「主は犯罪者になるつもりでありんすか？やめときなんし、直毛にするくらい似合わぬぞ」

「何サラツと俺の願望否定してくれてるの！？お前自分がストリートだからって、ちょっと勝ち組になつてない！？お前のさっきの一言は全国の天パを敵に回す一言だよ！天パが悪魔と契約を交わしても手に入れたいものをお前は否定したんだぞおおおお！！」

銀時は長椅子から腰を上げて悲痛な叫びを上げる。

「悪魔と契約とは……ちと大げさすぎやせんか？」

「ストリートのお前にはわかんねえよおお！！」

銀時は長椅子に座ってから体育座りをしていじけてしまう。

自分は生まれた時からの直毛なので銀時の天パに苦しむ気持ちは理解できないといえばできない。

（そんなに悪いとは思わんがの。主の天パは）

そう言おうかとも思ったが、元来のスキルである『素直になれない』が発動してしまい言えなくなってしまふ。

「そんなに直毛が望みならば理髪店に行つて、頼めばよかるう？金子で心配ならわつちが少しは出さんこともないが……」

悲痛な叫びを聞いて月詠の固有スキルの一つである『気配り』が発動してしまふ。

脱天然パーマをするための最善の案を述べてみる。しかも金額負担を自分がするのだから銀時にしてみれば願ったり叶ったりのものだ。

「……だ」

だが、銀時の表情は先程と変わらず暗かった。

「どうした？よく聞こえん。ハッキリ言いなんし」

「……無駄だ。理髪店でストレートパーマ頼んだら断られた」

「一軒や二軒が何じゃ。江戸の理髪店、全部回つたわけじゃないじやろ？」

月詠は正直、銀時の口から「回っていない」と言つてほしいと願つた。

「いや、江戸にある理髪店。全部回つて全部断られた。俺の天パは末期だから手遅れだつてよ……」

（天パに初期や末期があるとは初耳じゃ）

正直八方手を尽くして、「悪魔と契約交わしたい」と言っているのだ。

何と言つたらいいのかわからない。

ここで謝罪すると「同情なんていらねえから直毛よこせ！！」と。なき子の子役少女の名言じみた事が出てくるだろう。

このままほとぼりが冷めるまで放置というのも一つの手なのだが、月詠の良心回路がそれをよしとしない。

「世話のかかる男じゃ」

月詠は煙管を煙草盆の側に置いてから長椅子から立ち上がる。

「銀時、そのまま動くでなし」

「ん？何でだよ？」

「いいから動くでない」

理由も告げられずに「動くな」と言われて納得できるはずもないが、聞こえてくる銀時の抗議は右から左へと流す事にした。

月詠は銀時の背後に立って、右手を銀時の天パに置いて撫で始めた。わしゃわしゃと撫でられていている銀時の顔はわからないが、多分呆然としているだろうという事は想像できた。

「あ、あのお月詠さん。酔ってらっしゃいます？もしかしてお茶で酔ってしまわれました？」

銀時は自分が酔っているのだろうと思っているのだろう。そう思われても仕方がないといえば仕方がない。

素面の自分ではまず取りそうにない行動といえば行動だからだ。

「茶化すのはやめなんし……。わっちは素面じゃ。酔ってなどおらん。あとこつちを見るでないぞ」

そう言いながらも月詠は銀時の頭を撫でる仕種を停めようとはしなかった。

（この触り心地は天パにしかないものじゃからな）

頭を撫でられた銀時は全身に電気が走り、金縛りのように動けなくなっていた。

普段なら手を振り払うくらい出来たのだが、撫でられた際にあの時の事を思い出してしまい払うに払えなくなってしまったのだ。

「な、なあ。何でそつち向いちや駄目なの？つか、お前どんな顔でこんな事してるワケ？」

銀時はおそろおそろ訊ねてみる。

「う、うるさい！主はわっちにこのまま撫でられておればいいのでありんす！」

月詠の口調がいつもと違うように感じたのは気のせいではないだろう。

（明らかに照れている？もしかして自分のしている事に照れが混じ

つていたりする?)

銀時はそのような推測を立てるが、表情を見ていないのでどうしようもない。

(この娘、前からツンデレの素養があるって思ってたけどマジ!? マジでツンデレなの!? もしそうなら俺どうしよう……。やべーよ、萌え? もしかして燃え? どっちでもいいけどやべえよおおおお! !)

誰もいなかったら絶対に身悶えしてるだろう。何とかこらえてはいるが全身がブルブルと震えていた。

「銀時?」

自分の様子が先程より変だと感じたのか不安が混じった声をかけてきた。

「だだだ大丈夫、何ともねえよ。銀さんはいつもの銀さんだよ!」
精一杯虚勢を張ってみせる。

「銀時……」

月詠がまた名を呼んだ。

「……何だよ?」

何とか内に秘めた桃色ケタモノの獣を抑え付けたというのに月詠はすでに第二撃を繰り出そうとしていた。

「わっちは主のこの頭、嫌いではないぞ。もふもふしてわっちの頭にはない触り心地じゃ。それに撫でると癒されるような気がするしの……」

月詠の一言は銀時にしてみれば爆弾投下とほぼ同義だった。

「あのお月詠さん。やっぱりそっち見ちゃ駄目?」

「だ、駄目じゃ! 絶対に見るでないぞ!」

恐らく今まで一番強く否定したのではないかと銀時は聞いてて思う。(何コレ? 絶対この娘照れてるよね!? 誰か教えて三百円あげるから今このアバズレさんがどんな顔してるのか教えてくれええええ)

え！！）

銀時の願いを叶えてくれる者は誰もいなかった。
それから五分ほど銀時は月詠にトレードマークである天パを撫でられていた。

その間、銀時は月詠がどのような表情をして撫でているのかを悶々と想像していた事は言うまでもないことだった。

＊

志村妙とともに柳生家へと遊びに行っている神楽と定春はというと。

「おかわりアル」

「わん！」

神楽が空になった丼を、定春はエサ入れを柳生家の使用人に差し出していた。

「こうしてじつくりと神楽と定春が何かを食べているのは初めての
ような気がするが、凄いな……」

左目に眼帯をした一見すると少年に見えなくもないが実際は少女が
使用人に指示を促す。

柳生家の次期当主である柳生九兵衛やぎゅうきゅうへえが自分の分の夕食を食べながら
対面で食べている神楽と中庭で食べている定春の食いつりに目を
丸くしていた。

「私も新ちゃんから聞かされたときは半信半疑の部分もあったけど、
実際に見てみるとさっきの九ちゃんと同じように凄いて言葉しか
出なかったわ」

神楽の隣で食べている妙も神楽の異常な食欲っぷりには最初は驚い
ていたらしい。

「でも今は驚いていないところからすると、妙ちゃんは慣れたんだ
ね？」

「ええ。九ちゃんも何度か見てると慣れるから大丈夫よ」

妙が笑顔を浮かべながら、すまし汁をすすする。

「そうなのかい？だがコレだけの食欲となると万事屋の家計は火の車になるのでは？」

「ええ、銀さんももう少し稼いでくれればいいんだけど、あの人何故か金運にはめぐまれていないのよねえ」

「奴の銀髪が本物の銀ならば売って金子になるんだが……」

九兵衛は真面目な顔で当人がいたら間違いなくツツコミを入れてくるだろう一言を言う。

「それじゃタイトルが『銀魂』銀色の魂は決して折れず』が『禿魂』ハゲの頭は決して太陽になれず』になってしまふネ」

ぶほつと妙と九兵衛が神楽のボケに反応してしまい、咽てしまった。『げほつごほつ、神楽ちゃん。いきなり何てこと言うの。思わず禿頭になった銀さん想像してしまったじゃない！』

妙が涙目になって口元をハンカチで押さえながら神楽を睨む。

「ごめんアル。姉御」

神楽は謝ってから九兵衛を見るが、妙以上に重傷だった。

よりによって汁物を飲んで咽たので、口の中に入ったすまし汁が鼻の中を通ったのだ。

正直にいつて滅茶苦茶痛い。

「ウキ」

一匹の猿が九兵衛にティッシュを箱ごと持ってきてくれた。

九兵衛は受け取って鼻を噛む。

「あ、ああすまないな。寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク」フェザリオンアイザック」シユナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしているようではないのを僕は知っている留守スルメめだかかずのここえだめめだか…このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペおあとがよろしいようでこれにておしまいビチグソ丸」

「ウキ」

猿―――寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク〃フェザリオンアイザック〃シュナイダー三分の一の純情な感情の残つた三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしてっているようにでしらないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか……このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペおあとがよろしいようにでこれにておしまいビチグソ丸の頭を九兵衛は撫でる。

「もうすっかり九ちゃんにとつては最高の友達になつてゐるのね。無限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バブルムンク」フエザリオンアイザック」シュナイダー三分の一の純情な感情の残つた三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしてゐるようではないのを僕はしつてゐる留守スルメめだかかずのここえだめめだか：このめだかはさつきと違ふ奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペおあとがよろしいようにこれにておしまいビチグソ丸は」妙は一匹と一人の光景を見ながら微笑む。

だめめだか…このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペペペおあとがよろしいようでこれにておしまいビチグソ丸が見つ付けてくれたんだ」

「偉いアルなあ。寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパ
ンツ新八の人生バルムンク」フェザリオンアイザック」シュナイダ
ー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感
情裏切りは僕の名前をしっているようでしらないのを僕はしってい
る留守スルメめだかかずのここえだめめだか…このめだかはさつき
と違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむ
こうペペペペペペペペペペおあとがよろしいようでこれにてお
しまいビチグソ丸は。定春は見つけない代わりに色んなものを口に
含んじやうのが困りものアル。定春う、食べ物以外は口に入れちゃ
駄目アルよ！」

「わん！」

定春はドッグフードを食べながら返事した。

三人の少女と一匹の巨大犬と一匹の超長い名前を持った猿は夕食を
楽しんでいた。

「名前長すぎますぞおおおお！作者もいい加減キレますぞおお
おお！！若ああああああ！！みなさんんんん！！」

と、この食事に混ざりたがっている長身で長髪で糸目の男……柳
生四天王最強である東條歩が隣の部屋でツツコミたがっている事を
知る事はない。

*

外は完全に暗くなりカラスもおらず三日月が君臨し、数多の星が引
き立てるように輝いていた。

『万事屋銀ちゃん』では銀時が夕飯の準備をしていた。

月詠はテレビを見ながら煙管をふかせていた。

最初は月詠も手伝うと言ったのだが、銀時が断ったのだ。

彼女が足を引っ張る事はないが、立場的に今日の彼女は『お客様』だからだ。

（今は落ち着いて煙管吸ってテレビ見てるけどそろそろ限界だろうなあ）

銀時は和室のテーブルを拭きながら、月詠を試みるがどこかウズウズしていた。

煙管を咥えて、口から紫煙を噴出す頻度が増えていた。

（しゃーねえなあ）

銀時は布巾でテーブルを拭き終わると広間へと戻る。

「オイ、そんなに手伝いてえなら皿と茶碗人数分持ってきてくれや」

「わっちはテレビを見ておる。自分でやりなんし」

一瞬ビクツとしたが月詠は平静を保つような素振りをして煙管を咥えたままテレビへと視線を向ける。

「へえー。お前ってさ、そんな身体をウズウズさせながらテレビ見るんだあ。初耳だわあ」

銀時はにやあつと悪そうな笑みを浮かべる。

「そ、そうじゃ！　どういいうわけか知らぬがそういう癖かもしれぬな……」

テレビに視線を向けたままだが、思いつきり墓穴を掘っているのは丸わかりだ。

「さっきまでそんな事なかったじゃん。ま、俺は鍋とか用意してるからな」

銀時は内に秘めるSの魂を抑えてから、カセットコンロとガスカートリッジを持って和室へと戻っていき、カセットコンロにガスカートリッジをセットする。

鍋を上置く。

「具材具材つと」

銀時は点火させる前に先程調理した具材を台所から取りに行く。

広間には誰もおらず、台所で人数分の茶碗と皿を用意している月詠

がいた。

「……テレビは飽きたからの」

自分とは視線を合わせずに月詠はいそいそと手にしている茶碗と皿を持って和室へと向かっていった。

銀時が炊けたご飯が入っている炊飯器を持って、和室へと入る。

炊飯器のプラグをコンセントに差し込む。

「して銀時。今日の夕餉は何じゃ？」

「今日の夕飯は贅沢にすぎ焼きだ。お前肉ダメとかじゃないよな？」

「好き嫌いのことなら問題ありません。大丈夫じゃ」

銀時の確認に月詠は正直に答える。

皿を見ると、すぎ焼きの必須アイテムといえる卵がなかった。

「どれ、仕方ない。わっちが取ってこよう。冷蔵庫の中で合ってるな？」

「ああ。頼むわ」

卵は月詠に任せて、銀時は鍋に具材を入れてすぎ焼きの準備に取り掛かった。

第七訓 「仕事中毒者と世間知らずは世事に疎い」(後書き)

次回予告

第八訓 「何気ない仕種でも様になる人は様になる」

第八訓 「何気ない仕種でも様になる人は様になる」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り登録してくれている皆様。

前回のあらすじ

銀時「前回の銀魂　く銀色の魂は決して折れずくは……」

新八「銀さん、何某ドラマの冒頭の真似してるんですか？」

神楽「新八、簡単アル。作者が録画した。4を見ながらこの前書き打ち込んでるアル」

新八「何してんだ！？作者あああ！！」

銀時「えー前回は月詠がうちに来ました。神楽とお妙と九兵衛と定春が夕飯を食べてました。終わり」

新八「子供の夏休みの絵日記みたいに書くなあああ！！」

月詠「銀魂　く銀色の魂は決して折れずく、始まるぞ」

第八訓 「何気ない仕種でも様になる人は様になる」

一日で最も質量ともに充実した食事になることが多い。

朝食や昼食を食事の中心におく食文化では、一般に軽い食事となる。

照明が発達したこともあり、夜間の活動が長くなった地域では、こちらが重視される傾向が強い。

就寝前二、五時間程度の余裕を持って食べる傾向が見られる。

これを『夕食』という。

*

外は暗くなり、カラスも自分の巢へと戻って寛ぐかメスカラスがいるオスカラスはちょっとしたセクハラをしているかもしれない時間帯。

ぐつぐつと『万事屋銀ちゃん』の和室はすき焼きの匂いが充満していた。

鍋から湯気がたち、空腹の腹を刺激するには十分なものだ。

「ほれ、オメーの分だ」

坂田銀時は茶碗に飯を装ってから対面の月詠に渡す。

「ああ、すまぬ」

先程まで器に卵を入れて掻き混ぜていた月詠は飯が入った茶碗を受け取る。

「さてと、そろそろ腹減っちゃったからなあ。食おうぜ?」

「そうじゃな」

銀時は両手を合掌する。

「何だよ？」

月詠が何故か目を丸くしていたので、問い詰めてみる。

「いや、主がそのような事をするのが意外に感じてな……」

「あのな、俺だってちゃんとする時はちゃんとするの。食べ物に感謝っつーもんは持つてんだぞ。俺は」

銀時は抗議と同時に月詠を睨む。

「そつでありんすか」

月詠は銀時の視線から逃れながらも意見を一通り聞いてから、自分も合掌する。

「「いただきます」」

同じタイミングで発して、箸を手にして鍋をつつき始めた。

月詠はネギを手にして、器の中に入れる。

銀時はじーっと月詠の箸捌きを見ている。

ネギを入れ終えた後は豆腐を入れて、次に糸こんにやくを器の中に入れていた。

「何じゃ？主も早^{はよ}う取らんとなくなるぞ？」

月詠の箸は鍋ではなく、自分の器の中にある。

つまり肉をとらなかつたという事だ。

本来ならば銀時は喜ぶべきなのだが、今までの鍋で起きた出来事を思い出すとここは更に慎重に行動した方がいいと判断した。

（コイツ、肉を取らねえ。さっき好き嫌いはないって言ってたから肉は食べれるのに何で取らねえんだ？）

銀時は月詠の行動の真意を図ろうとする。

そのためか銀時の箸は先程から全く動こうとしない。

銀時は月詠の行動を想像してみる事にした。

銀時の想像、その一。

俺がここで肉を最初に取りとうとする。

しかあし！そこを月詠がわざわざ箸を置いて俺の右手を叩く！

「主はただでさえ、甘味の過食で糖分を取りすぎじゃ。野菜を食べ
て他の栄養分も取らねばならぬぞ」

なあんて言いながらよお！コイツは俺の器をふんだくって、野菜を
ポイポイと放り込んでいくんだなあ！

まあ何だ。場合が場合ならわざわざ気い使ってくれてありがたいね
えなんて思っちゃうわけなんだけどよお。

今回は鍋だよ。すき焼きだよ！

そんな考えはシュレッダーにかけて捨てちまった方がいいわけなん
だよ。

何でかつて？そりや決まってるじゃねーかよ。

すき焼きの主役ともいえる肉が食べねーからだよお！

だから今回に限ってはこいつのスキルである『氣遣い』も邪魔にし
かなんねえわけで……

（いや待て待て。これじゃただ単に俺の身体を氣遣つての行動にな
っちゃう。いくら月詠コイツがいい人でも鍋という人の本質が明るみにな
っちゃう場でもソレを保つてられるかあ？）

神楽はもちろんの事、万事屋の中では良心的位置に属するメガネこ
と志村新八でさえも油断できない相手となる。

尤も、自分が知る限りではもう二度と鍋を囲みたくない相手は下の
ババア（お登勢）と年増女キャサリンだが。

銀時は想像その一を強引に打ち切ってから、更なる想像をしてみる
事にした。

銀時の想像その二

俺が肉を取ろうとする。

しかあし！何故か俺の前には既に肉の姿がなかったあー！！

俺が取ったわけじゃねーから肉を食べたのは月詠ってことになるっ
！！

「甘いぞ。銀時、鍋は戦場じゃ。一瞬たりとも気を抜いた者が全てを失うでありんす」

そうヤツは、月詠は最初に自分の器に野菜を装う事で俺の肉への警戒心を削いで、油断したと思われる瞬間に肉を根こそぎ持つていきやがったんだ！

抜かったぜえ……。やはりコイツ、『いい人』だの言われてもその本性は『修羅』いや『夜叉』だったってわけかよ……。

この気迫。神楽や新八の比じゃねえ！ババア級、つまり『皇帝鍋レオン』になる資質があるってわけかよお！！

クソオ！！何で俺には鍋の女神が笑ってくんねえんだよおおおお！！！！

（待て待て待て待てえ！！よおおおおく考えろおお！！相手が神楽やお妙ならさっきの想像は当てはまるだろおけどよお。月詠だぞ。

有り得なくね？コイツ何だかんだで俺達が『ひのや』で団子だの菓子だのタダ飯食いに来た時には、取り合いを避けるようにわざと席離れたりして、『人の和』つつーの？そーいうのを何だかんだで大事にしちゃうようなヤツだぞお）

銀時は想像その二も有り得ないと判断したのか、やっぱり打ち切りにした。

もう一度月詠を見る。

自分が二度も妙ちきりんな想像をしているとは知らずに、月詠は肉を取らずに器の中を野菜を口に入れている。

「銀時、箸が止まっておるぞ？肉は食さんのか？」

月詠が箸が進まない自分に対して気遣ってくれている。

「あのさあ、一つ聞いていい？お前どーして肉取らないの？」

銀時の質問に対して月詠は目を丸くする。

「？主は何故そのような事を聞くのじゃ」

月詠は問い返してきた。

すき焼きはぐつぐつと匂いを醸し出している。

「いや、何っーかよお。すき焼きの主役っていえば肉じゃん？普通、肉を真っ先に狙ったりしねえ？」

銀時は独自の理屈をぶつけてみる。

「すき焼きは食べたい物から食べるものじゃろ？違うのか？」

月詠は答えてからまた箸でネギを掴んで器の中に入れる。

それから肉に手をつけた。

「主らとて、すき焼きを食べる事はあるのじゃろ？そのような事をわっちに聞くとはい体どのような食し方をしておるのか疑問に感じるが」

月詠は肉を口の中に入れてからしつかり味わっている。

（コイツ、間違いねえ！鍋レオンはおるか鍋將軍にさえなる気がねえ！無欲だ！あまりに無欲すぎる！俺が今まで構築してきた想像をはるかに超えてやがるううう！！）

すき焼きという食事の中で欲深^{バカ}き者どもしか見ていない銀時にとつて至極当たり前な返答をした月詠はもはや異質でしかない。

（てことは何？俺は今まで変に取られる心配もないのに勝手に被害妄想してたワケえ？とんでもねえピエロじゃねえかああああ！！玉乗りのした上にジャグリングまでしちゃってるよおおおお！！）

銀時は手にしていた箸をカタンと落としてしまう。

「どうした？全く食が進んでおらんではないか？どれ、器を貸せ。わっちが入れてやろう」

月詠がご飯を飲み込んでから、こちらの様子をうかがってから銀時の空っぽの器を催促する。

「あ、ああ。俺ちよつと飲み物取ってくるわ」

器を渡してから銀時は立ち上がって、台所へと向かっていった。

月詠は銀時の器にすき焼きの具をどのように装うかを考えていた。
（あのような事を訊ねてくるとは、まともな食卓についている者の台詞とは思えんな。あやつめ、扶養家族にまでひもじい思いをさせているのではあるまいな……）

『ひのや』で集りに来ている万事屋一同を思い出す。

銀時も神楽も決して他者に分け与えるというような事をしている姿を見た事がない。

新八でさえも、余裕があれば分け与えようとするがない時は自分の分だけはしっかりとキープしていたりする。

つまり万事屋一同に『分配』とか『半分こ』というようなモノが存在しないということだ。

食に対しては意地汚いまでに貪欲だという事がわかる。

『弱肉強食』が万事屋ルールならば、銀時があのような質問をしてくるのもある意味では頷ける事だ。

すき焼きを見る。

野菜は幾分か自分が食しているため割と減っているが、肉はハッキリいって殆ど減っていない。

銀時の先程まで態度から察するに野菜よりも肉が食べたいというのは明々白々だ。

肉を装っていく。量からして自分が食した二倍くらいだ。

後、健康のために野菜も装う。偏食は許さない。

「ま、こんなものじゃろ」

満足した装いができたのか、月詠は銀時が腰掛けていた場に器を置いておく。

「おお悪りいなあ。やっぱり、晩飯といえはコレだろお」

台所に移動していた銀時は盆に乗っているものを見せてきた。

徳利である。お猪口も二つある。

銀時が自分に見せた物を見て、月詠は目を丸くする。

「銀時、主の厚意はありがたいのだが……、わっちはその……」

酒を飲んだ場合、自分は確実に暴れ狂って銀時を屍モドキにしかねない。

もてなされている側としてみればもてなす側をそのようにするのは良心が痛みまくる。

月詠は銀時を見るが、彼は不思議と余裕の物腰をしていた。

（おかしい。わっちが酔った場合で一番被害を被っているのは銀時のはず、何故そんなに余裕を持つておる？まさか……SだSと言っておったが実はもう片方に目覚めたのでは……）

そこは吉原の住人なのか、銀時が逆位置の属性に目覚めたのではないかと推測する。

この表情は『余裕』ではなく『期待』なのではないだろうか。つまり、銀時は虐められたがっているということになる。

（こんな事なら日輪に聞いておいた方がよかったのかもしれない。日輪ならS男やM男、あらゆる男の扱いに慣れておるからの）

吉原の住人といっても自分は『遊女』ではないので、その手の事には長けていない。

自分がそのような事を考えている間に銀時は席に着いて、盆からテーブルへと徳利とお猪口を移動していた。

自分の下にもお猪口を置いて、徳利を傾けて注ぐ。

（酒が入っておる……）

こうなると、空気を読んでしまう月詠としては飲まなければならぬ。

しかし、飲んでしまえばその時点で静かな夕飯は地獄絵図に変貌してしまう事は間違いないだろう。

「ほれ、どうしたあ？折角入れたんだから飲めよ？」

銀時が飲むように急かしてくる。

（何故じゃ？何故、主はするように余裕なんじゃ！？銀時いいいい！！）

自分がこうまで心の中で戦っているというのに銀時は余裕の表情を浮かべている。

（主はそこまでわっちに虐められたいというのか！？）

お猪口の中に入っている液体を睨む。

そして対面で焼きの具を食べながらご飯を食べている銀時を見る。

（ええい！どのような目に遭っても知らんぞ！このクサレ天パああ

！！）

覚悟を決めた月詠はお猪口を手にして一気にグイッと飲み干した。お猪口の中の液体は食道を通って、胃の中へと流れていく。

（ん？）

酒を飲んだときに来る感覚が全くない。

全身に一気に襲い掛かるフワッとした感覚がまるでないのだ。

両目が据わるような感覚もない。

意識が途切れる感じも全くない。

両目をパチパチとさせてから、対面の銀時を見る。

「銀時、主はわっちに何を飲ませたのじゃ？まるで酒の成分がないぞ？地上で流行っている新種の酒か？」

真剣な表情で訊ねる自分に対して、銀時はいと。

にまあっと思戯が成功した子供のように笑っていた。

「そりゃそーだ。ソイツは誰が飲んでも絶対に酔わねーからな」

銀時もくいつと勢いよく飲む。

「あ、もう鍋の中が空になってんなあ。足していくか」

銀時は残っていた野菜と肉を空寸前になっている鍋に入れた。

確認するかのように月詠は徳利を手にして、お猪口に入れる。

じつと眺めてみる。

「これは……」

眺めても何かがわかったわけではないが、一つだけわかった事があった。

匂いがしないのだ。酒ならではの独特の匂いが全くしない。

お猪口の中に入っている中身をもう一度、口の中に含む。

飲み干して、お猪口を置いてから鍋の中身を調理している銀時を見る。

「主、これは水じゃな？」

「ごめいとー。オマエに酒飲ませたらエライ事になるのはわかりき

つてるだろ。だからといって水をただ単にコップに淹れて渡すつても味気ねえからな。だから趣向を凝らしたってワケよ」

「金欠の際に思いついた生活の知恵、じゃな」

「ぐっ……、さらりと図星突きやがる……」

自分の正直な一言は銀時の矜持を傷つけたのかもしれない。

「じゃが、わっちはコレがいい」

コレも嘘偽りのない感想だ。

*

銀時と月詠がすき焼きを食べている頃。

江戸の海岸では青い法被を着た平均年齢十五、六歳で編成されている妙な集団が飯ごうでご飯を炊き、具となる野菜やら肉をメンバーの面々が包丁で切り刻んでいた。

余ったメンバーが何をしているかというところ、呑気に砂地で寝ているわけではなく、三日間の拠点となるテントを張っていた。

それらの行動を厳しくも温かく見守っている二人がいた。

『寺門通親衛隊』の隊長である新八と、副隊長を任されているタカチンこと高屋八兵衛である。たかやはちべえ

「オメエ等あ！予定の時刻まで迫ってるぞお！！気合入れろ！！気合い！！」

タカチンは腕時計を見ながら、夕食班とテント班に檄を飛ばす。

ウオッスウウウウ！！

という男臭い雄叫びが響く。

夕食班もテント班も先程より機敏な動きで作業に取り掛かっている。

「新ちゃん。今回の強化合宿、大まかな課題はクリアしたんじゃない？」

「『結束』という点では今までよりも強くなったからクリアだけど、

それだけだったらまだ半分くらいだよ」

新八は万事屋で出勤している時でさえも滅多に見せないくらい真剣な表情をしていた。

「半分？」

「今回の合宿はさつきも言ったように『結束』も大事だけど、これからの親衛隊我々の存在意義にも影響するんだ」

「存在意義って新ちゃん、改革でもするの？」

タカチンはない知恵を振り絞って今の状況にもっとも相応しい言葉を出す。

「それは明日の朝、言うよ」

新八は親衛隊員達のチームワークのよさを満ち足りながら見ていた。

ちなみに今日の親衛隊の夕飯はカレーだったりする。

なお余談ではあるが、カレーの味は根性をつけるために『極辛』だったりする。

*

『万事屋銀ちゃん』では順調に食事は進んでいた。

水を飲みながら、月詠は吉原では最近、コンビニを建設しようとしていると言った。

「まあ吉原も夜の街だから流行るかもしれないな」

開放されたといっても吉原は『夜の街』なのでコンビニを置いたら成功すると銀時は思っている。

「まさか、外装も地上のヤツそのものじゃねーよな？」

吉原は街のつくりからして和風だ。地上に建っているコンビニの外装は洋風であり、吉原で建てたとしたら浮きまくっているだろう。

「いや、その辺りは土建屋と散々話し合った結果、外見は吉原の建造物と何ら違和感のない建物になるらしいと日輪が言っておったな」

「ふーん」

銀時は茶碗を手にするが中身は空であり、炊飯器を開ける。

「貸しなんし。わつちがやろう」

「お、おお。頼むわ」

月詠が空の茶碗を銀時から催促し、ご飯を装う。

（ふーん）

銀時はお猪口に入っている水を飲みながら、月詠の仕種を凝視する。
『女を捨てた』など『女扱いするな』などと言う彼女だが、どうみても『女』でしかない。

茶碗にご飯を装う、という行為だけで人を釘付けにする事が出来るのは『男』では無理な事であり、『女』でなければ無理だろう。

以前に新八が神楽が炊飯器のご飯を井に装う行為をただ何も言わずにじつと見ていた事があったが、多分今の自分と同じ感覚で見ているのだらう。

（ま、男がどんなに同じ事しても様にはならねーわな）

ただただじーつと見てしまう銀時。

「銀時」

月詠はご飯がこんもり入った茶碗を銀時に差し出す。

「お、おお。オメーも食えよ？コレ俺達で食わなきゃならねーんだからな」

茶碗を受け取って、銀時は平静を装いながらすき焼きに箸を伸ばし始めた。その仕種はどこかきこちない。

「わかつておるわ」

月詠は何故銀時の動きがきこちないのか気にはなったが、あえて訊ねようとはしなかった。

（助かったぜえ。コイツが空気読める子でよあ。まさかさっきまでオマエの飯装う姿に見とれてましたあなんて口が裂けても言えねえからなあ）

もしバカ正直に言ってしまったらどうなるかはわからない。

照れ隠しにクナイを投げられるにファイナルアンサーをしたくなる。オーディエンスもファイファイファイもテレフォンも必要ないだ

ろう。

『み』から始まって『た』で終わる真っ黒なオッサンが主催する番組の最終問題に出題してくれたら確実に一千万ゲットできるサービス問題なのだが、残念な事にここは『万事屋銀ちゃん』であって、真っ黒なオッサンもいない、つまり一千万もゲットできないのだ。銀時はそんなバカな事を考えながらも、はあと溜め息をついた。

「どうした？銀時」

「あ、いや。何でもねーよ。ちょっとバカな事考えてただけ」

「主はバカなのじゃから、どんだけ考えてもバカな事にしかならんぞ。脳みそをそのような事で酷使させるでない」

月詠が気にかけてくれながらもサラリと毒のある事を言つてのけた。「んだとテメーえ！！テメーの脳みそだつてエロ知識満載のピンク色じゃねーか！！大体昔の漫画じゃ『ピンク』とか『桃色』ってのバカの代名詞なんだぞおお！！」

「何じゃ！！主はわつちの脳みそでも見たことでもあるのか！？主の脳みそなんてフグの白子の代替物に使われりや本望じゃろ！！」
売り言葉に買い言葉の応酬……口喧嘩が始まりながらも、二人の箸は止まることなく鍋へと伸びていった。

アオーンとかぶき町の通りをうろつく野良犬が吠えた。

第八訓 「何気ない仕種でも様になる人は様になる」(後書き)

次回予告

第九訓 「お泊りって最初は興奮するけど慣れると自分の家と変わらない」

第九訓 「お泊りつて最初は興奮するけど慣れると自分の家と変わらない」(前

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

前回より間が空いたことをお詫びいたします。

前回のあらすじ

長谷川 「銀魂ゝ銀色の魂は決して折れずゝ、前回の依頼は……」

神楽 「マダオが真面目になつてるアルよ」

銀時 「明日、雨が降るかもなゝ」

新八 「二人とも長谷川さんが真面目にやつてるんですから黙っておかないと」

月詠 「前は、大まかに言うとなつちが銀時と共に夕食を食べたのじゃ」

長谷川 「これで決まりだ！」

銀時&新八&神楽 「テメエは何しにここに来たんだああー!!」

九兵衛 「銀魂ゝ銀色の魂は決して折れずゝ。始まるぞ」

第九訓 「お泊りって最初は興奮するけど慣れると自分の家と変わらない」

睡眠。

人類及び生きとし生ける生物が共通で持つ行為の一つ。

睡眠欲、食欲、性欲の三つは三大欲求と呼ばれており、誰もが持つて当たり前のものとして捉えられている。

昼寝をする際には午後一時から三時がベストとされ、その際に必要な時間は十五分から三十分くらいとされている。

また平均睡眠七時間以上の人間が最もうつ病にかからないといわれている。

*

夕食が終わると、坂田銀時は食器及び鍋の後片付けをしていた。金属たわしを使って洗剤を浸した鍋をこしこしと洗っている。

「この汚れ、なかなか落ちねえな。俺に喧嘩売ってるんですかあ？
コノヤロー！」

鍋にこびりついている汚れに悪戦苦闘していた。

「何を言っておるのじゃ？主は」

二時間ドラマを煙管を咥えながら観ている月詠が台所を一瞥してからまたテレビに顔を向ける。

「いくら安いっても全然落ちないんじゃない意味ねえじゃねーかよ。つ
たく……」

銀時は洗剤に文句を言いながらも洗浄を続ける。

「どんな銘柄を使っておるんじゃない？主」

好奇心をくすぐるには十分なので、月詠は長いすから腰を上げて台所へと移動した。

「コレ。お前洗剤とか買ったことねーからわかんねーだろ？」

銀時は月詠に見せても、あまり実のある話が出るとは思っていないけど一応見せてみる。

「……いや、これは以前日輪が使っていたものに似ていると思う。

買えば最後まで使う日輪が割と早く買い換えた原因だったと記憶しておる」

「マジかよ……」

自分の周りで家事の達者な相手は結構限られている。そういった人間の意見は結構重要なものだ。

「どうする？明日買い替えに行くか？」

「いや、ウチはお前ん家と違って金に余裕ねーからな。使い切るわ」「苦勞人じゃのう……」

買い換えるための金が不足している原因は主では？とツツコミたかったが黙っておいてあげることにした。

「いいからお前はテレビでも見てろって。後でデザート出してやるからよ。それに今見逃すとわかんなくなるぞ？」

「二時間もあるドラマでありんす。二、三分見逃したからといって理解できなくなるものでもなかるう？」

「お前バカだねえ。二時間ドラマは前半が大事なんだよ。この手の番組を見慣れているプロは前半三十分くらいで真犯人見抜いちゃうんだからさ」

「前半で犯人を見抜いたら後半を観る意味がないように思えるが？」

「そこは答え合わせみてーなもんだろ。ホレ、早く戻ってちゃんと観てろ。後で俺がお前から内容を聞くんだからよ」

「何じゃそれは……。わっちを解説役にするつもりか……」

銀時の言葉に呆れながらも、広間に戻ってテレビ鑑賞に専念する事にした。

「デザートはアイツが持ってきてくれたヤツで十分だろ」

冷蔵庫を開けて月詠が持つてきてくれた土産を見て、それを出す事にした。

洗い物を終えて、食器を片付け終えてから土産の菓子とそれに乗せるための皿とフォークを二人分取り出して広間に戻った。

「で、どこまで進んだんだよ？」

「まだ一人死んだだけじゃ。富豪の家らしいが、どうもお決まりといえはお決まりかもしれないぬが家族仲は今ひとつよくないようじゃ」

「ふーん。大方さあ大元のジジイがおっ死んだから遺産相続で揉めてるとかじゃねーの？」

銀時は『富豪』と聞いて、今までの二時間ドラマを観て得た経験で語る。

「……主は超能力者か？」

「どうやら大当たりだったらしい。」

「で、誰が疑われてるんだよ？」

銀時は月詠の向かいにある長椅子に寝そべりながら、更に訊ねる。

「殺された当主の内儀じゃ。後妻だから息子連中が真っ先に疑っておるわ」

月詠の解説を聞きながらも、銀時はテレビに視線を向けている。

「役人達は疑ってたか？」

「もちろんじゃ。それがどうかしたか？」

月詠は何故銀時がそのような質問をしてくるのかわからない。

「あー、犯人はその奥さんじゃねーわ」

態度はそのままだが、銀時は自信を持って断言した。

「何故そう言い切れるのじゃ？」

「ん？この役人やってる俳優はな、二時間ドラマでは結構的外れな事言うキャラクターばかりやってるんだよ。だからコイツが犯人と行ったヤツは真っ先に犯人から除外しても問題ねーな」

「そうなのか？」

「そーなんだよ。ま、観てりゃわかるって」

銀時は起き上がって月詠の手土産である『ぶじ屋』の菓子に手を出

した。

自分の皿に置いてから月詠の皿にも置く。

月詠はテレビに夢中で気付いてもいない。

それから十五分後にドラマは新たな展開を向かえ、富豪の家の使用人の男が殺されていた。

「銀時、また内儀が疑われておるぞ」

「ま、観てなつて。一時間十五分くらいになると大逆転があるからよ」

月詠の視線をどこ吹く風で銀時は余裕しゃくしゃくだ。

そして銀時が言うようにドラマは大逆転を向かえた。

有力容疑者となっていた内儀にはアリバイがあったのだ。

これによって事件の見方もがりと変わるとドラマの主人公は打ち明け、ヒロイン共々事件解決に乗り出していたのだ。

「こちらの女人、吉原で何度か見た事あるぞ……」

「え？マジ？」

月詠の意外な裏情報に銀時は食いつく。

「確か演技のために吉原の遊女の事を学ばせてほしいと言ってきおったことから……」

「解放されてから本当にフリーダムになったな。吉原」

「遊女達も喜んで手を貸したと聞いておる。身体目当てではなく『生き方』目当てに来た者は初めてのことじゃからな」

月詠はテレビから視線を外さずに現在の吉原事情を説明してくれる。

「そーいや、遊女つて休みとかあるのかよ？」

月詠が休むようになった事は知っているが、他の吉原の住人がどうしているかは知らない。

「わっちらにあるのじゃ。無論ある。といつても、わっちのように地上に出たりはせんぞ。大抵は吉原を歩いておるか『ひのや』で屯しておったりが殆どじゃ」

煙管を吸いながらも月詠はテレビに夢中になっている。

男優がホスト役の演技を学ぶためにホストクラブに入店したことが

あると聞いた事がある。それと似たようなものだと思うことにした。
「ふーん」

ケーキを食べ終えた銀時が立ち上がる。

「何処へ行く？」

「風呂を入りにいくんだよ。ドラマ終わってから入んだろ？あと四十分くらいで終わるしな」

「……そうじゃな。主に言われるまで全く気付きもせなんだ。頼む」「へーい」

銀時は背を向けた状態で手を振りながら風呂場に向かった。

「この者が真犯人じゃったのか……」

ドラマはようやくエンディングを迎えたようだ。

（あの様子じゃ真犯人わかんなかったみてーだな。俺が開始一時間で犯人わかったっていつたら絶対に悔しがるだろーなあ）
DSの本性が表に出ながらも、銀時は湯船に湯を入れた。

*

神楽が定春、志村妙と共に宿泊する柳生家ではというと。

「ホラね。神楽ちゃん、九ちゃん。私の言ったとおりだったでしょ」

「姉御お凄いアル。銀ちゃんみたいに犯人言い当てたネ」

「妙ちゃん。どうしてわかったんだい？」

「ここでも『万事屋銀ちゃん』で銀時と月詠が観ていた二時間ドラマを観ていた。」

この中で年長者である妙が見事犯人を当てたのだ。

神楽も柳生九兵衛も尊敬の眼差しで見ている。

妙としてもそのような眼差しで見られると悪い気はしないが実を言うと、正規の方法で犯人を言い当てたわけではなかったりする。

（銀さんと同じ方法で犯人当てたとは言えないわね……）

妙や銀時が犯人を言い当てた方法とは極めて単純な方法だ。

ただ単にドラマに出演している俳優を見て、被害者もしくは加害者

を演じた回数が圧倒的に多い者を見つけて目星をつけて後はその者の行動を見ていただけなのだ。

製作者泣かせの裏技である。何せトリックも何もあったものじゃないからだ。

なお余談ではあるが、二時間ドラマ観る事に関しての『超プロ』とも呼ぶべき者達はドラマを観ずに新聞のテレビ欄に記載されている俳優の名前を見ただけで犯人を当てる事が出来たりする。

更に余談ではあるが、そんなガールズトークで盛り上がっている部屋の隣ではというと。

「若あ！！私もその者が犯人であると見抜いておりましたぞおおお
お！！」

長髪で糸目の東條歩が会話の中に入ろうと画策していたのだが、定春に噛まれて頭から血を流して沈黙した。

*

ドラマが見終わった後、月詠は風呂に入り銀時はその間にケーキを食べる際に使用した皿とフォークを片付けて、台所で洗っていた。洗い終えて棚に片付けてから、また広間に戻ってテレビのチャンネルを変えるが、めばしいものはなかった。

「そーいや神楽以外に女が家の風呂入るのは初めてだな……」
ふと思ったことを口に出す。

（いやいやいや、何考えてんの俺。思春期真っ只中のガキじゃねーんだから女が自分の家の風呂に入ったからって興奮しなくていいんじゃないーの！？）

自分の中にある妙な興奮を抑えながらも銀時は自問する。

風呂場の方に視線を向ける。

いまあそこには一糸纏わぬ月詠がいる。

（だから何なんだよ！俺は覗きになんか行かねーぞ！！わざわざ行つて頭にクナイ刺されにいくようなドMじゃねーからなあああ！！）

過去に二度もT O L O V Eるの経験がある銀時は三度目もあると踏んでいる。

「ま、ここから動かなかつたら何も起きねーしな」

銀時は長椅子に寝そべると、月詠が座っていた長椅子にバスタオルが置いてあった。

（何であああああ！！）

心の中で銀時は叫んだ。

確認するようにして目の前にある物体を見る。

バスタオルがある。

「オイオイ冗談じゃねーぞ。何でわざわざT O L O V Eるがやつてくるんだよ！？アイツ、もしかしてわざとじゃね？」

このまま放つたらかしにもできないのは確かだ。

だが迷わずに届けることもできない。

相手が新八や神楽なら大丈夫だ。

新八は同姓だし、神楽は女といっても子供だからだ。

だが、今の相手はそういうわけにはいかない。

『女』を否定しているが、真正正銘のデカプリ娘なのだ。

（待て待て待てえ！何否定的になつてんだよ？たかがバスタオルを風呂場に届けにいくだけなんだぜ。パツと行ってパツと戻ってくりゃ済むじゃん）

前向きに考えてみれば何処にもT O L O V Eるの要素はない。

（大丈夫。大丈夫。パツと行ってパツだ）

銀時はバスタオルを持って、風呂場へと向かった。

月詠はまだ入浴中らしく、出る素振りはない。

「おい。バスタオル忘れてたぞー。ここ置いとくからなー」

「すまぬー」

風呂場越しに月詠の声がした。

（よし！ここにタオル置けばミッションコンプリートだぜ！）

今回に限って何にも起こらなかった事に銀時は心底感謝していた。バスタオルを月詠のお泊りセットの上に置いて銀時はそそくさとそ

の場から離れようとした。

風呂場の扉を見る。

その向こうには全裸の月詠がいる。

覗けば即座にクナイのシャワーが自分の身体全身に降り注がれるだろう。

水滴が排水溝に流れるのではなく、真っ赤な血が流れる事は間違いない。

（さ、帰る帰る）

銀時が広間に戻ろうとしたときだ。

かさかさかと蜘蛛が現れて、銀時の右足の甲に乗っていた。

「げえええええ、蜘蛛おおおお！！」

乗っかっている蜘蛛を見て思わず飛び上がったしまい、乗っかっている蜘蛛を払うために片足立ちにするが、それがいけなかった。

軸足となっている左足がバランスを崩してしまい、ケンケンと保とうとするが健闘空しくそのまま風呂場の扉にもたれてしまい、扉は溝から外れてそのまま銀時を乗せたまま風呂場へと向かっていった。ドタンという音が響いた。

「……………」

「……………」

湯船に浸かっている月詠がこちらを見ていた。

表情は目を丸くしている。

銀時は月詠を見る。

髪を下ろしており、色っぽさより可愛らしさが表に出ていた。

「銀時」

荒げる事がないが冷え切った声を月詠は出す。

「辞世の句を言いなんし」

「二度あった（五） T O L O V E るこれで（七） 三度目だ（五）」

その直後クナイのシャワーが銀時に降り注いだ。

和室には布団が二つ敷かれており、その間には衝立が置かれていた。クナイのシャワーを浴びた銀時だが、数秒で回復して月詠の後で入った。

「あのさあ俺が悪かったしさあ。謝ったじゃん。事情も説明したじゃん。何でまだ怒ってんの？もしかしてあの日だったり……、ナンデモアリマセン」

銀時はデリカシーのない事を言おうとしたのだが、衝立から覗き込んでいる月詠がクナイを構えていた。

月詠自身実を言くと、先程の事は今まで同様『事故』だと認識しておりもう既に許していたりする。

（しかし、どうも当人の前だと何故か、のう……）

だが何故かそういうことが出来ない。

固有スキルである『素直になれない』が発動したのだ。

「電気消すぞー」

銀時が睡魔に半分浸食されているような声を出して、部屋の電気を消そうとする。

和室は完全に黒の空間と化した。

月詠は衝立を見る。

その向こうには銀時がいる。

銀時は既に眠ったのだろうか。

耳を澄ませて寝息を聞いてみるが、一つも聞こえない。

（困った。眠れん……）

衝立越しに気になる異性がいることもさることながら、見知らぬ天井を見上げる事は彼女にとっては未知の体験であるため、逸る気持ち表に出ているのだろう。

眠れそうにないので、気を悪くするかもしれないが隣の人物に声をかける事にした。

「銀時」

「何だよ？」

すぐに返事が返ってきた。

「眠れんのじゃ」

「そんなの知るかよ。俺はお前にクナイをドスドス食らって痛くて眠れそーにないんですけどー」

先程の事を根に持っている口調で銀時は抗議する。

それを言われると、他に言い返し方がない。

「む……なら話し相手に付き合え」

「いやだよ。そんなに眠れねーなら数数えて寝りゃいいんじゃない。羊が一匹、二匹とかよ」

面倒臭そうにしながらも銀時は月詠にアドバイスを送る。

「仕方ないの。あまり気は進まぬが吉原版を試してみるか」

「吉原版？」

「十二単を一単脱ぎ、十二単を二単脱ぎ……」

「ちよつと待てええええ！！」

月詠が数を数えようとするが、銀時が中断した。

「何じゃ？人が折角数を数えようとしているのに……」

「何脱衣する服の数を涼しそうに数えてるんだよ！テメエはよおおお！！そんな聞かされたら余計眠れねーわああ！！」

衝立を押しつけて、銀時がツツコミを入れた。

「む、だからわっちは最初に言っただんじゃ。あまり気が進まぬ、と何故かは知らぬが皆さっきの主のように苦情しか言わぬのじゃ。困ったもんでありんす」

「困ったもんでありんすじゃねーよ！何で寝るための行為でムラムラしなきゃいけないーんだよ！！本当、吉原は『眠らない街』って呼ぶにふさわしいわ！！」

銀時はツツコミを終えてから息を整えてまた布団に入る。

「ちゃんと羊数えて寝ろよ。羊だぞ！」

「しつこいぞ。主」

さすがにそこまで言われると、月詠は銀時を睨んでから羊を数える事にする。

（あれ？）

月詠はここでひとつ疑問が浮かんだので、また衝立を押しつけて銀時に訊ねようとする。

「銀時」

「何だよ？いー加減眠らせてほしいんですけどー」

銀時は本当にダルそうな声を出していた。

「羊とはどんな動物じゃ？」

「は？」

「だから羊を数えろと主は言ってくれたが羊がわからぬ。教えてくれなんし」

「羊ってのはなあ。真っ白で毛がモジャモジャしてて、定春並みにモフモフしてそーな角がクリンと曲がっている動物だよ」

銀時は自身が知る限りの情報を提供してくれたので、自分なりにイメージしてみる。

「つまり、主の頭が足を生やして行動していると思えばいいんじゃない？」

という結論がでた。

「俺の頭を引き合いに出すんじゃないやねえええ！！」

銀時がさらに怒号を上げたが、月詠は気にせず自身の想像した羊を数える事にした。

第九訓

「お泊りって最初は興奮するけど慣れると自分の家と変わらない」

（後

次回予告

第十訓

「無欲恬淡は人の美德であり、欠点」

第十訓 「無欲恬淡は人の美德であり、欠点」(前書き)

執筆が遅れてしまい大変申し訳ありませんでした。

ストックが尽きた事ともう片方の作品がクライマックスに差し掛かっているので、またしばらく更新が遅れます事をご了承下さい。

前回までのあらすじ

神楽 「前はツッキーがセロをやったところからアル」

銀時 「思いつきりデタラメじゃねーかああー!!」

新八 「神楽ちゃん。セロって土方さんの煙草ネタの時に出てたドラ。

ンボールのパロディキャラだったよね？」

神楽 「そうアル。小林」

新八 「ワクワクしない名前だよね!!小林って!!」

銀時 「銀魂 〱銀色の魂は決して折れず〱。始まりまーす」

第十訓 「無欲恬淡は人の美德であり、欠点」

欲望。

人が誰しも持つものであり、ありすぎると困るものである。

またなさすぎるのも困るものである。

前者の場合は周囲はもちろん己の身を滅ぼしかねないから。

後者は他者につけ込まれる恐れもあるから。

しかし、人が生きていくうえで必要不可欠なものだというのも事実であつたりする。

*

朝となり雀が鳴き、太陽の光が『万事屋銀ちゃん』の窓に差し掛かる頃。

「あー、眠ーい。早起きなんていつ以来になるんだよー」

後頭部をわしゃわしゃと搔きながら、坂田銀時は布団から起き上がる。

ジャスタウェイ目覚まし時計があるのだが、このところ『万事屋銀ちゃん』の仕事は殆どが昼からだったり夜からだったりして目覚まし時計をセットする必要性を感じなかったので、放置していたりする。

また、仕事がなければ朝から晩まで眠りこけているので目覚まし時計の役割は殆ど果たせていなかったりする。

寝巻きから普段の服へと着替え終えてから、広間に向かい卓に置か

れているテレビのリモコンを手にして電源を入れる。

『本日のお天気は雲ひとつない晴れです！』

テレビ画面にはお天気お姉さんである結野クリステルが今日も笑顔で本日のお天気を衆人環視に伝えていた。

それを見て、銀時は仏壇に拝むようにして「ありがたや」。ありがたや」と言いながら、テレビの前でひざまづくようにして合掌をしている。

銀時の外せない日課の一つである。

「さーと、朝飯でも作りますか」

いつもは昨日の残り物（残っている可能性は限りなく低い）なのだが、日輪から貰った軍資金で買い込んでおいたのだ。

まずは朝食となるご飯を炊く。

二人分なので炊く米の量は少ない。

神楽もないので一合でも足りるだろう。

とぎ終えた米を炊飯器に入れて、電源を入れる。

「さーとおかず、おかずっ」と

卵を割って、出汁などを入れて掻き混ぜる。

玉子焼き器に卵をたらず。

じゅーっという音を立てながら、鼻腔をくすぐる匂いがする。

鼻歌交じりにてきぱきと動きながら銀時は朝食を二人分作っていた。

和室で寝ていた月詠は実を言うと、銀時が目を覚まして和室を出る前に既に起きていた。

くすぐる匂いが彼女の鼻腔を刺激した。

「玉子焼きか……」

『ひのや』で日輪が何度も朝食や昼食などで作っているので匂いは完全に記憶していた。

寝巻きから普段着へと着替えていく。

鏡台もないので持参した手鏡で髪を整えていく。

身だしなみをきちんと整え終えた月詠は和室の襖を開けた。

「よお、おはよーさん」

「……おはよう」

日輪、晴太、百華の面々以外には朝の挨拶などした事がないので緊張してしまうが平静を装う。

「朝飯の支度ならできてるから席に着けよ」

「あ、ああ。すまぬ」

月詠は自分が昨日に座っていた長椅子に腰掛ける。

彼女の前には炊きたてのご飯と味噌汁、そして玉子焼きが並べられていた。

銀時も腰掛ける。

「さ、食おうぜ？」

銀時は促すと同時に合掌してから箸を手にし始めた。

「いただきます」

月詠も釣られるようして合掌して箸に手をつけて、朝食を食べる事にした。

「で、オメー今日はどうするんだよ？」

味噌汁をすすってから銀時は月詠に本日の子定を訊ねる。

自分は今回は『仕事』であり、依頼人である彼女の要望を応える義務のようなものがある。

だが相手が『遊び』に関してというか巷説こうせつや流行に敏感な相手なら銀時としても悩みどころではないのだが、今回の相手はその手のことに関しては恐ろしく疎い月詠なのだ。

「吉原には帰れんからの。地上の文化に多く触れるのもいいのじやが、わっちはこの手のことが疎い。銀時、主は暇な時は何をしておるのじや？」

月詠はご飯を口にしてから、銀時に休日のごし方を訊ねる。

「俺？まあ金に余裕がありやパチンコに行ったりするなあ。ねえ時は家でゴロゴロしてテレビ見るかジャンプ読んでるか寝てるかくれーだな」

銀時は休日の過ごし方を話すが、月詠は溜め息をついていた。

「オイイイイ！人に訊ねておいて何だよその反応はよおおお！！」

「主の過ごし方は褒められるものではないということがよくわかった」

「オマエねえ。休日に本読んだり、勉強したり計画的に休日過ごすヤツなんて滅多にいなーよ？大抵のヤツは無鉄砲極まりないんだからさあ」

月詠は茶をすすりながら銀時の話を聞いている。

「銀時。主の休日の過ごし方が褒められるものではないが、その中でひとつ興味深いものがある」

「何だよ？ジャンプか？昼寝か？」

「ぱちんこ、なるものじゃ。何じゃそれは？吉原に似合いそうな言葉じゃからな」

月詠は茶の二杯目をすすっていた。

「あー、妙な期待をしてるとこ悪いけどよ。そこはオマエの思ってるよーなところじゃねーからな」

茶碗とお椀と皿を片付けながら、銀時は想像を膨らませている月詠に釘を刺した。

「わ、わっちは妙な期待などしとらんぞ！」

図星だったのか月詠は頬を染めながらも反論する。

銀時としてはSの魂が燃え上がるのだが、今はお仕事なので我慢する。

（あー、ヤベーよ。女のこういう反応って男でSなら間違いなく滾っちまうってえ）

自分と全世界の『男』を同列視する銀時。

月詠は醜態を誤魔化すようにして煙管を吹かしている。

銀時はジャスタウェイ時計を見る。

ちょうど開店して間もない時間帯だった。

ここで世間で『プロ』と呼ばれている人達は情報を仕入れて、開店

前から並んでいたりするのだが銀時はそこまで中毒者ではないので
開店してから訪れるようにしている。

「オメー、外出る準備は出来てるか？」

「問題ないぞ。外へ出る準備に怠りはない」

銀時の声に月詠は抜かりはなしと言う。

こうして二人はパチンコ店へと向かった。

＊

江戸の海岸は相変わらずいくつかのテントが立って数人の法被を羽
織った妙な連中がラジオ体操をしていた。

志村新八が腕を振って足を伸ばす運動をしながら率先して行っ
た。

「お前等あ。たかがラジオ体操と怠るなあああ！！ウォーミング
アップを怠ってそのまま帰らぬ人になった先人は数知れずなんだ
かなああああ！！」

ウォツスウウウウ！！

タカチンをはじめとする親衛隊達も新八に感化されながら、先程と
は別人の気迫で腕を振って足を伸ばす運動をしていた。

ラジオ体操も終えた頃には新八含め、『寺門通親衛隊』は全身汗だ
くになっていた。

ラジオ体操で汗だくになる人間も珍しいといえば珍しい。

ちなみに今日の朝食は気合を入れるためにカレーだった。

しかも『激辛』である。

法被を着た男達が数人でカレーを食べながら汗を流している後景は
見ている側としては微笑ましいという言葉が出るものではなかった。

＊

『万事屋銀ちゃん』を出た銀時と月詠は目的地であるパチンコ店まで急ぐ事もなく、ゆっくりのペースで歩いていた。

銀時は小指を耳の穴に突っ込んでおり、月詠は煙管を吹かして地上の文化を得るために周囲を見回していた。

月詠が吐いた煙はかぶき町の空へと飛んでいく。

「ん？」

視線を感じたので、そちらに目を向けるがすぐに感じなくなった。

かぶき町を歩くとよく感じるのだが敵意や殺意といった類ではないし、地上は吉原と違って自分に通じる勝手も少ないので気にしないことにしていた。

「銀時」

それでも気になったのか、隣人に訊ねる事にした。

「ん？なんだよ？^{かわや}廁か？」

「違うわたわけ。どうも、地上に出た時から時折感じるものがあるのじゃ」

銀時の予測を即座に切り捨ててから、月詠は打ち明けた。

「感じるもの？何だよソレ」

「ソレがわからぬから主に聞いておるのじゃ」

「あのね月詠さん。銀さんも何でも知ってるわけじゃねーから答えられる事と答えられねー事があるわけよ。感じるものと聞かれたって答えられねーのよ。わかる？」

遠回しに『わからない』と銀時は言っている事は丸わかりだ。

そもそも『何かを感じる』というあまりに抽象的なもので的確な返答が出来ればその者は超能力者か神様なのかもしれない。

「で、何を感じるんだよ？そもそもどういふときに感じるんだよ？ソレ」

それでも銀時は月詠の質問に対して回答を探そうとしていた。

これまでの事やどういった条件下でそのように感じるようになったのかを銀時は月詠に思い出させようとする。

「そうじゃなあ。わつちがかぶき町を歩いているとソレを感じる事があるぞ」

「吉原ではねーのか？」

月詠の証言に銀時は確認するように問い返す。

「ハツキリ言つてしまえば何度かあるが、かぶき町こっちの方がソレを感じる機会が多いな」

銀時も腕を組んで考えながら、周囲を見回す。

何かヒントがあるかもしれないと踏んでの事だ。

一人の男が月詠を見ていた。

自分がそれを見ると、さつと男は視線を外した。

そんな行動をする男が何人もいた。

（はっはーん。なるほどな）

銀時は顎に手を当てて、確認するように隣を歩いている月詠を見てから彼女が言うソレの正体を理解した。

「銀時、どうした？一人だけ納得するでない」

月詠としては自身がわからないのに銀時が訳知り顔するのは気に食わないようだ。

「いやな、お前が感じるモノの正体がわかったんだよ」

「何じゃソレは？早く教えなんし」

月詠が詰め寄ってくる。

「視線だよ。し・せ・ん」

銀時が簡潔に答えた。

「しせん？指で何かをほじくるのか？」

「違いーよ！何で陸。圓明流！？お前何気にマ。ジン派じゃねーだろーなあ！？そんなこと俺あ許さねえぞー！！マヨ方と一緒にだなんて絶対に絶対に許さねえからなああああ！！」

銀時は根っからのジャンプ派だ。故にマ。ジン側に月詠が傾く事をよしとはしなかった。

理由があるとするならばマヨ方十四マヨこと土方十四郎と意気投合されてはたまったものではないからだ。

（ちょっと何でマヨ方出てくんの？アイツは確かにマ。ジン派だけど、月詠コイツがその事で誰と意気投合してよーが俺には関係ねーじゃんねえちよつと待って。もしかして俺、嫉妬、ジェラシー、エンヴィーしてんの？いやいやいやありえねーよ！そんなことあるわけねーよ！絶対にねー！！）

銀時は強引に自身に湧いた気持ちを押さえ込む事にした。

「銀時」

月詠が名を呼んだので銀時は現実へと引き戻される。

「どうしたんじゃ？急に心ここにあらずといった感じになっておつたぞ」

「あ、ああ。何でもねーよ」

（やつべえ。コイツがサイコメトリーとか特殊能力持ってなくてよかったぜ……）

今の心境は読まれてたら自分が恥ずかしくて穴掘って入りたくなる。「視線とっておつたが、何故その者達はわつちを見るのじゃ？」自分に視線を向けているのが、月詠がかぶき町で時折感じる『ソレ』の正体である事はわかったが何故自分なのかは理解できていないようだ。

「お前。本当そういうことに関しては鈍いのな」

「何が鈍いのじゃ？」

月詠は本当にわかっていないようだ。

「このままはぐらかしてもラチあかねーから言うぞ。お前を見てた連中はお前が地上では珍しい美人だから見てんの！」

銀時も言うのが恥ずかしかったのか語尾が荒かった。

「わつち、美人なのか？」

月詠は確認するように銀時に訊ねる。

「まあブスじゃねーことは確かだな。試しにその辺のヤロウ連中に聞いてみな。声揃って言うてくれるから」

煙管を口に咥えたまま腕を組んで唸る。

「銀時。男は美人を見るものなのか？」

「男の目つてのはな、ブスは外して美人だけを映すように出来てるんだよ」

「器用に出来ておるの」

「女の目が宝石は映っても石ころが映らねえってのと同じ理屈だよ」
「主、全世界の『女』という種を敵に回す発言はやめておいたほうがいいと思うぞ」

月詠は銀時のトンデモ発言に一応釘を刺しておく事にした。

「あれえ。銀さんじゃないのお。美人の姉ちゃん連れてデート？」

銀時と月詠がパチンコ店に着いて入店しようとした矢先に背後から知った声がしたので振り向くと、そこには上下共に薄汚い格好をしてグラサンと煙草が似合う負け組的な碇。ンドウがいた。

「ちよつとおおおお！まだエ。アネタ引つ張ってるのおおおお！！！」

。ンドウが地の文にツツコミを入れてくる。

「名前間違ってるから！！俺の名前は。ンジ君のお父さんじゃないからねえええ！！」

。ンドウもとい長谷川泰三ことマダオが更にツツコミをする。

「マダオと俺の名前の位置が違ってるだろおおお！！」

マダオこと長谷川がツツコミを入れているのは姿も形も声もしない相手である。

かぶき町でなくても、立て続けに三回も大声を張り上げると変人を見る眼差しを周囲から向けられるのは無理もない事だった。

その眼差しの中には銀時も含まれていた。

「さ、行こうぜ」

「あの御仁は確かプールで知り合った……」

月詠は記憶を引っ張り出して思い出そうとする。

「他人の空似だって、俺の知り合いに誰ともわからないヤツにツツコミ入れる知り合いはいねーよ」

「ちょっと銀さん！見捨てないでえええ！！」

長谷川の声がこだまするが、銀時は月詠の手を引っ張ってさっさとパチンコ店に入店した。

第十訓 「無欲恬淡は人の美德であり、欠点」(後書き)

次回予告

第十一訓 「この世で一番の悪女は幸運の女神」

第十一訓 「この世で一番の悪女は幸運の女神」(前書き)

長らくお待たせしまいまして申し訳ありません。
それでは第十一訓の始まりです。

銀時 「えー前回までのあらすじはというとお……」

神楽 「銀ちゃんがツッキーに。チンコを教えるところアル」

新八 「神楽ちゃあああん。パチンコは別に伏せなくていいからねえー!!」

月詠 「銀魂 〱銀色の魂は決して折れず 〱 始まるぞ」

第十一訓 「この世で一番の悪女は幸運の女神」

ギャンブル。

それは一時の悦楽と一生の後悔が襲い掛かる劇薬。

それは『なし』では生きられないほど骨抜きにすることが出来る麻薬。

その依存性はあらゆる処方箋を煎じたとしても決して治らない不治の病。

*

坂田銀時と月詠、そして長谷川泰三の三名はかぶき町に数あるひとつであるパチンコ店『フィーバー』に来ていた。

店に入る前からジャラジャラとパチンコ玉の音が聞こえ、様々な電子音が耳を劈くように鳴り響いていた。

ハッキリ言って、うるさい。

慣れている人間ならともかく、慣れていない人間には居心地が悪い事この上ないといってもいいだろう。

銀時と長谷川は出そうな台を物色していた。

月詠は正直、両耳に刺さるようなこの騒音に耐えるのに精一杯だった。

（慣れるしかないのじゃろうな……）

煙管を銜えようと思いつが、銜え煙管が通るとは思えないので自重していた。

「『金色魔界侍』ばっかりだなあ。俺、これの前のタイプで当てた事ないんだよねえ」

長谷川は今店内におかれている台の内容を見ながら、一人愚痴る。

「俺は割と勝率よかった方だよ」

銀時は以前に打った時のことを思い出していた。

「銀時」

月詠は銀時、長谷川に釣られるようにして後を歩いているが何をしているのかはわからない。

「ん？何だよ」

「打つのならば打てばよいのではないか。主も長谷川殿も先程からグルグルと店内を見回して何をしているのじゃ？」

素人ならではの意見だろう。

パチンコの台は比較的に当たりやすいものと当たりにくいものがある。

銀時と長谷川はギャンブルは好きだが決して『ジャンキー』ではない。

現にこの二人、パチンコ攻略雑誌は講読しないしその手の情報を収集することに関しては積極的というわけでもない。

ここから彼等にとって『ギャンブル』とは『人生を懸けた大勝負』ではなく『楽して金を得るための手段』と認識している事がわかる。ちなみに前者の認識をした者は勝つために知恵を振り絞る。ギャンブルを仕掛けているのが人間である以上、運否天賦がいかに危険だという事を熟知しているからだ。中には甘い認識で破滅の片道切符を手に入れている者もいたりする。

後者で認識している者は基本的に運否天賦と考えているので、比較的に勝つ可能性は低い。主催者側にとっては格好の鴨という事になる。

「当たる台、探してんだよ」

銀時が簡潔に告げながら店内をぐるぐると回る。

「やるからには勝たないとね」

長谷川が付け足す。

この二人が言っても、説得力は微妙だったりする。何せあんまり勝

っていないのだから。

「……………」

月詠は全くの素人なのだが、流石に焦れてきた。

煙管をふかそうかどうかと考えていると、銀時と長谷川がパチンコ台を睨んでいた。

「おい。ここで打つぞ」

「あ、ああ。わかりんした」

銀時が宣言してから、現金をパチンコ玉に換えに行く。

三人がそれぞれ現金をパチンコ玉に換えると、それぞれが決めた席に座る。

銀時と長谷川は手馴れた感じで手順を踏んでいく。

月詠はパチンコ玉と銀時達の行動を交互に見ていた。

「ん？打たねえのかよ？」

「どうすればいいのじゃ？」

「俺や長谷川さんがさっきやってたようにやりゃいいんだよ」

打ち方がわからない月詠は当然訊ねてくるが、銀時はさして難しい手順を踏んでいるわけではないので自分達の先程の行動を思い出してすればいいと言う。

月詠は頭で思い出しながら、行動を開始する。

ちなみにこの『フィーバー』で置かれているパチンコ台はCR機ではなく、現金対象の『現金機』と呼ばれているものである。

三人がパチンコ台に座ってから一分後。

「銀時」

「何だよ？」

「玉がどんどん穴の中に入っていくぞ」

煙管を銜えてレバーを回している月詠は退屈そうな表情で銀時に訊ねる。

「女の子が『玉』とか『穴』とかをしれっと言うんじゃないですね」

！」

銀時は月詠に注意しながら、当たることを願いつつレバーを回していた。

五分後。

「あー、銀さん。俺今日は幸運の女神とのデートは無理かもしれないねえ」

長谷川は本日五本目の煙草を口に銜えてライターに火を灯して、喫煙する。

婉曲的なことを言っているが、用は運が回ってこないという事だ。射出されたパチンコ玉はすべて底の穴へと向かっていく。

「へええ。俺は何とか約束までこじつけるとこまでいけたけどねえ。幸運の女神とのデート」

銀時は長谷川と違い、本日は多少運があると見ているようだ。

月詠はそんな二人の会話を見ながら射出されたパチンコ玉の軌道を眼で追いかけていた。

パチンコ玉の何発かが電子画面の真下にある穴に入っていた。

その直後、音が鳴り始めた。

「?????」

月詠は自分の台の変化があった事は理解したが、それが何なのかはわからないので隣でしかめっ面になっている銀時の袖を掴んで引く張る。

「銀時」

「何だよ？俺は今幸運の女神とのデートがキャンセルかもしれないかどうかの瀬戸際だって時に」

銀時の運気はどうやら下降し始めているようだ。

銀時は苛立ち始めているが、隣人「お客様を困らせるわけにもいかないで隣を見してみる。」

「オイ！？おま、当たってる！っ！か幸運の女神、俺達とのデート

をキャンセルしてコイツに走ってるうつうつ!!」

銀時は両目を大きく開き、月詠の下に幸運の女神が来ている事を確信した。

「ぎ、銀時。わっちはどうすればいいんじゃない?」

銀時が興奮気味に叫んでおり、長谷川も覗き見ながら月詠は隣人に指示を仰ぐ。

「ひたすら打って打って打って打ちまくれええええ!!」

銀時と長谷川――幸運の女神に振られた者同士は現在、幸運の女神に猛アプローチまでされている月詠にただそのように告げるしかなかった。

それから一時間後。

『フィーバー』を出た三人は勝者と敗者という言葉がはつきりとわかるくらいにまでなっていた。

幸運の女神はどうやら同性愛者だったのか、月詠は初めてにも拘わらず大勝ちしてしまった。

その証拠に銀時が担いでいる紙袋にもお菓子がたくさん入っていた。全部を景品にしているわけでもないの、残りは現金に換金して懷の中にしまいこんでいる。

彼女にしてみれば思わぬ収入である。

そして残りの二人はというと。

銀時は何とか幸運の女神を振り向かせる事が出来たため、月詠ほどではないが勝つ事が出来た。

現在担いでいる紙袋の中にはいくつかは自分で手に入れた景品も入っていたりする。

長谷川はというと、幸運の女神に振り向かせる事が出来なかったため負けてしまった。

せっかくアルバイトで稼いだ金もみんなパチンコ店の肥やしにされてしまったのである。

「銀時」

「振り向くな。運を吸われるぞ。マダオ（まるでダメなオナ）にされちまうぞ。声かけられても左から右へと流せ。無視しろ。いないもんだと思えよ」

職業は物騒なものだが根は善人である月詠は敗者である長谷川の呻き声を無視しようという気にはなれない。

しかし、銀時は非情にも『見捨てる』宣言をする。

運のない人間が生きていくための唯一の方法は運のある人間に纏わりつくことだ。

つまり長谷川は幸運の女神をたらしこんだ月詠を標的にしているのだ。

銀時はそれを察しているため、月詠に長谷川を相手にするなと警告する。

だが、呻き声を上げながら後ろを歩いている長谷川を無視できるほど月詠は冷徹ではない。

こうチラチラと見てしまう。

「目を合わせるなよ。合わせたら終わりだぞ。運吸われるぞ」

もう一度銀時は警告してきた。

「お姉ちゃん。俺にも運分けてくれよ。HPとMPを回復させてくれよ」

オッサンがキモイ声を出してきた。さしずめ、『誘いの声』だ。

月詠がこちらを見てくる。対処に困るから銀時に仰ごうというのだ。周囲の人達も妙な視線でこちらを見始めていた。

正直ウザく感じてきたので、どうしようかと銀時も悩む。

（長谷川さんを追い払うのって楽じゃねえからなあ。コイツは体力あるほうだから走って逃げるってのが一番有効だしなあ）

プランを立て終わると、銀時は足を止める。

釣られるようにして月詠もあと後ろのマダオも停まる。

そして銀時は月詠に確認するように訊ねる。

「お前、足に自信あるよな？」

「わたちの仕事は足が命じゃ。それなりにはうぬぼれさせてもらっているが……」

「よし、俺が三、二、一、零って言ったら走るぞ。いいな？」

「わかりんした」

小声での相談事を終えると、銀時と月詠はまた歩き出す。

「三」

銀時の声と共に二人は速度を速める。

「ちよっ……銀さん？お姉ちゃん？」

長谷川も引き離されまいとして早足になる。

「二」

銀時が声をあげ、更に速度を上げる。

二人の視界には先程まで緩やかな景色が早く見える。

「一」

二人の速度は更に上がる。

視界に映る景色も早くなっている。

「零。走れええー!!」

銀時と月詠が足を強く地面に踏み込んで一気に走り出した。

「え！？ちよっ……」

長谷川はいきなり走り出した二人の背中がどんどん離れていくのを見て、自身も走り出す。

「待ってええええええ!!俺の運!!幸運の女神iiiiiiii!!」

長谷川も自分の運氣を得るために必死で追いかけている。

「ぎ、銀時。追いかけてくるぞ!？」

「そりゃあ、オメーから運を得るためにマジだからなあ。簡単には諦めねえよ!」

後ろから追いかけてくる長谷川を見ながら、銀時と月詠は意見を言う。

「それはどう考えても比喻じゃろ？現実に考えて人の運を取る事など、人間にはできません」

月詠の言う事はしごくまともである。

「それはごく普通の正統派な小説での話だろうが！この話『銀魂』だよ！第一話から現在までどこか『銀魂』っぽくないかもしれないけど、『銀魂』なの！何が起るかわかんねえんだよおお！」

銀時がどこかメタな発言をしながらも走ることはやめない。

「俺に幸運プリーイイイズウウウウ！」

長谷川がまだしつこく追いかけてくる。

「たく、しつけーなあ！長谷川さん！幸運の女神は同性愛者なの！アンタの胸毛満載の真っ平らな胸よりコイツのナイスバディを選んだの！！俺が幸運の女神でも絶対に選ぶけどね！」

「何を言っておるんじゃ！主は！」

月詠は右手で胸元を隠すような仕種を取ってから空いた左手で銀時の後頭部を叩いた。

バランスを崩すが、銀時はそれでも走る事をやめなかった。

銀時と月詠が走り出してから、十分後。

二人の後ろに長谷川の姿はなく、上手くまけたようだ。

「何つうしつこさなんだよ。まったく……」

「あの御仁の認識をわっちは誤っておったのかもしれん……」

かぶき町の河川敷まで逃げた銀時と月詠は両肩で息を切らしながらも、呼吸を整えていた。

「お前、長谷川さんの事どんな風に思ってたわけ？」

「マダオ（まあそれなりに気のいい人間んだけどダメな部分のあ
るオトコ）じゃ」

「いや、それでいいんじゃない。間違ってたねーよ。うん」

月詠の認識に誤りはないから改める必要はないと銀時は告げる。

「んでよ。これからどうする？パチンコには行っだし、あと行きたいところってあるか？」

「……………」

銀時が訊ねるが、月詠は即答しない。

目的は達したので、正直戻ってもいいのだがそれはそれで味気ない

と感じたのだろう。

「特に今は思い浮かばん。それに主に持ってもらっている荷物の殆どはわっちのものじゃ。街を回るにしても手がふさがってはやりにくいじゃろっ」

「じゃあとりあえず一回戻るとすつか」

「そうじゃな」

銀時と月詠は『万事屋銀ちゃん』に戻る事を選択した。

*

その頃柳生家ではというと。

「キヤツホーイ！株が大当たりで五千万ゲットネ！」

『万事屋銀ちゃん』の私財を投げ打つても到底買えそうにない超大型のテレビで神楽、志村妙、野牛九兵衛はTVゲーム版の『○太郎電鉄』をプレイしていた。

「あら神楽ちゃん。油断しちゃダメよ。まだ貧乏神がCPUに憑いてるし距離からして神楽ちゃんに近いから憑かれる可能性があるわよ」

妙は年長者らしく、コントローラーを操作しながらも笑みを浮かべながら神楽に注意している。

「妙ちゃんこそ気をつけた方がいい。神楽も近いが距離的には妙ちゃんも似たようなものだから、資産の多い妙ちゃんを狙ってくる事もありえる」

距離からして一番貧乏神から離れている……いわば安全地帯の九兵衛が妙に注意する。

ちなみに株の収益などを抜きにした単純な持ち金の場合の順位は一位は妙で二位が神楽、三位が九兵衛で最下位がCPUとなっていた。しかも貧乏神はまだ可愛らしい段階なのでいい方だが、これが進化されてしまった日にはプレイヤー達にとっては災厄の存在になりかねない。

「みんな。これからが本番よ。貧乏神が『キン』がつくものになったら要注意よ！」

「了解ネ！姉御」

「うん。妙ちゃん」

三人は仲良くTVゲームに熱中していた。

スナック菓子。コしたの袋が辺りに散乱しているが、そこは現在中庭で一仕事終えた定春の世話をしている東條歩がやってくれるので誰も気にしなかった。

志村新八や銀時、そして神楽は定春の仕事を処理するのは手馴れているが、東條にはもはや地獄の苦しみでないのだが三人とも見向きもしなかったのは言うまでもないことだ。

＊

『万事屋銀ちゃん』に戻り、荷物を置いた銀時と月詠は冷蔵庫の中身を見ていた。

日輪からいただいた軍資金と報酬のおかげで今までにありえないくらいに冷蔵庫はギツシリと詰まっていた。

しかし、銀時は知っている。

神楽とが帰ってきたら定春が帰ってきたらこの程度の量はすぐに消えてしまう事を。

「しょーがねえ。ちょっと早いけど買いだしに行くぞ」

銀時は冷蔵庫を閉める。

「何故じゃ？まだ量はあるぞ」

月詠は訝しげな表情をする。

「オメーは甘いよ。いちご牛乳並に甘いよお月詠ちゃん。神楽と定春が帰ってきたら三日ももたねーよ。賭けてもいいくらいだぜ。のるか？」

「いや、神楽や定春の事は主の方が知っておる。その賭けどう見ても主が勝つようにしか出来ておらぬ。それに乗るほど、わっちはお

人よしではないぞ」

「バレてたか……」

「バレバレじゃ」

月詠は一服と洒落込んでおり、煙管をふかしている。

「お前、何が食いたい？」

銀時は『客』である月詠のリクエストに応えるために訊ねる。

「主に任せる」

「その答えは作る側にとっては地獄の苦しみになるんだぜ。わかってる？」

「昨日すき焼きを食してみてわかった。主の料理は美味い。だからわっちは主を信じているぞ」

彼女の瞳には疑いの色は全くない。

「……おま、そういう事をサラツと言うなよ……」

「？何かおかしな事を言ったか？」

日頃言われ慣れていない上に褒め慣れていない銀時は思わず照れてしまう。

疑って何ぼの職業に就いていながらも、彼女は『疑う』という行為があまりにも似合わないと思えてしまうのは銀時だけではないはずだ。

「……何でもねーよ。じゃあ今日はパスタにでもするか。一応聞くけど食えるよな？」

銀時は照れた表情を見られたくないのか、そっぽ向いて月詠に確認する。

「問題ない」

「よし。決まりだ！」

月詠の返答内容に満足すると銀時は本日の夕飯を決定した。

第十一訓 「この世で一番の悪女は幸運の女神」(後書き)

次回予告

第十二訓 「一つのを買い込んでいるからといってそれが好きとは限らない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0967t/>

銀魂 ～銀色の魂は決して折れず～

2011年10月29日02時45分発行